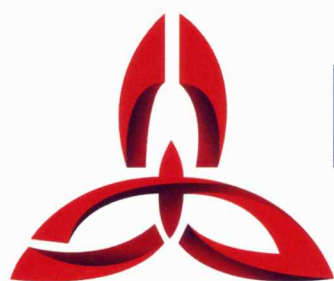




T **KY**
2026 **甲府中学
甲府一高
東京
同窓会**
同窓生、その窓がひらくとき。



変わらぬ想いを胸に、新たな時代へ。



HAYANO
GROUP



株式会社 早野組



甲府通運株式会社



ネット・39 甲斐株式会社



電話 やさしい手 甲府



株式会社 ロード



電話 ハートフルスタッフ



山梨縣立甲府中學校校歌

昭和三年十月二十三日制定

作詞／三井 甲之

作曲／東京高等音樂學院

一、我等は日本に生まれたり

神の御代より一系の

皇統戴く我國に

生れしことのうれしさよ

皇國の榮えは天地と

共に窮りなかるべし

二、大和島根に山めぐる

甲斐の國あり水清き

郷土の歴史顧みよ

我等の務め輕からず

見よや南に富士ヶ嶺は

皇國の鎮めと聳えたり

三、大海原の揺りやまぬ

波をも風をも凌ぎつつ

護れ皇國を諸共に

國民擧りて國のため

撓まず萎縮まず辟易がず

進むぞ大和ごころなる

山梨県立甲府第二高等学校校歌

昭和二十三年十月二十二日制定

作詞／上条 馨

作曲／小松 清

一、甲斐の國 み中に建ちて

古へゆ 雄心傳へ

新しき 世の鑑とし

勉めてむ この學舎に

二、日に新た また日に新た

彌高き のぞみをもちて

眞なる 理究め

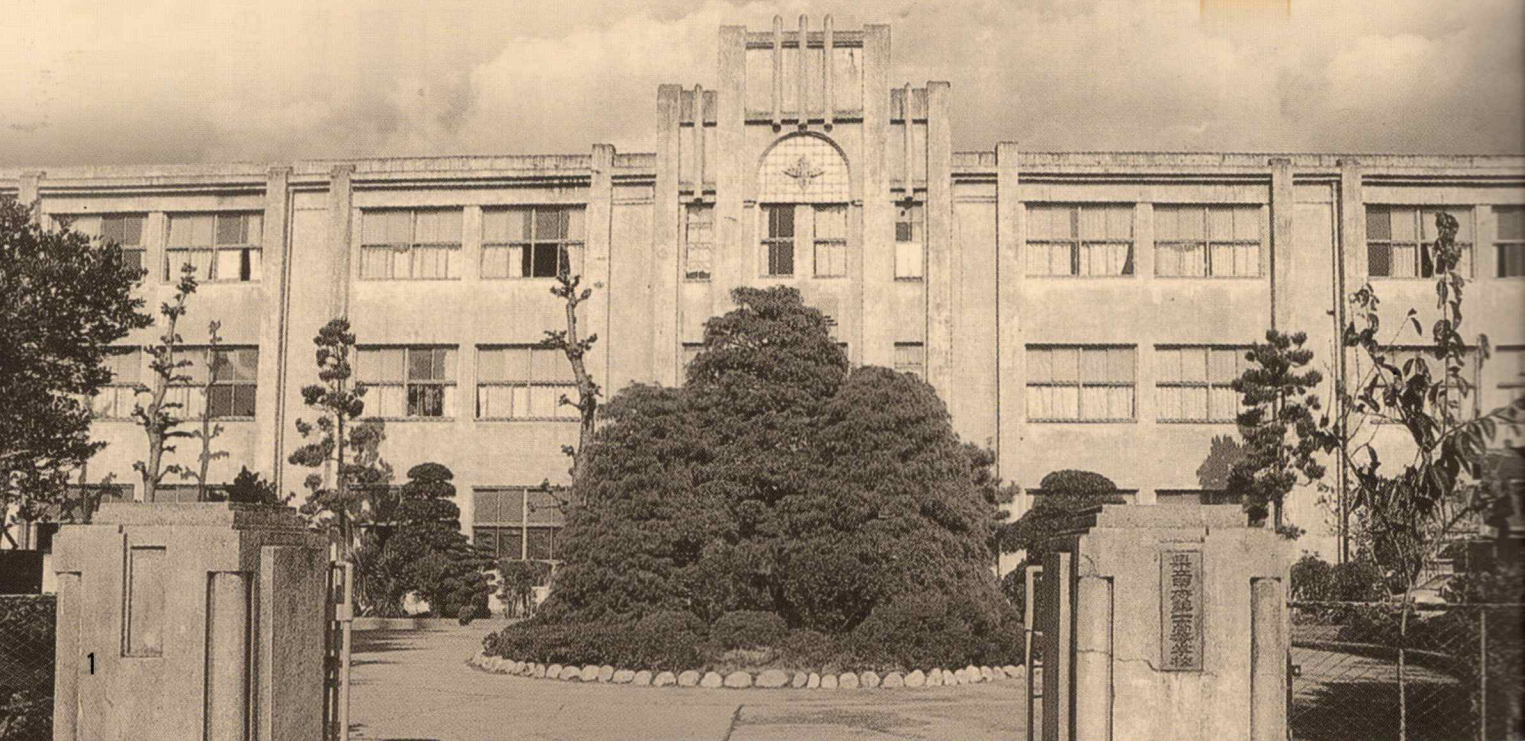
勵みなむ 若人我等

三、聳え立つ 芙蓉の高根

清き哉 甲斐の山川

もろともに 玉と磨きて

贊くべし 天地の化育



日新鐘に寄せて



内なる「窓」をひらき、
一高卒業生としての自覚を問う

東京同窓会 会長 清水 昭

本年もまた、伝統ある記念誌「日新鐘」の刊行にあたり、一言ご挨拶を申し上げます。第66回東京同窓会の開催に向けて、古屋高一幹事長をはじめとする昭和62年卒業の当番幹事の皆様には、多大なるご尽力を賜っておりますことに、厚く御礼申し上げます。

本年のテーマは「同窓生、その窓がひろくとき」です。私たちは今、混乱を極める国際情勢や急激な社会変革の中にあり、まさに明日をも見通せぬ「不安定な時代」を生きています。こうした時だからこそ、私たちは一度立ち止まり、自らの内なる「窓」を大きくひらいてみる必要があるのではないのでしょうか。

その窓から見えるのは、かつて甲府の地で「日新」の精神を刻み込んだ若き日の自分であり、共に切磋琢磨した学友の姿です。私たち甲府一高生にとっての「自覚」とは、単なる母校への愛着に留まりません。それは、どのような困難に直面しても絶えず自己を更新し続け、社会の良心として誠実に歩むという、気高い精神の在り方そのものです。

同窓会という集いは、その窓を互いに開け放ち、世代を超えて「二高魂」を確認し合うとても貴重な機会です。本日の集いが、皆様お一人おひとりの心の窓をひらく機会となり、一高生としての誇りを新たにする契機となることを願っております。

結びに、本総会、懇親会の成功と、皆様の益々のご健勝を祈念いたします。巻頭の言葉とさせていただきます。



日新鐘に寄せて

甲府第一高等学校 校長 大久保 雅司

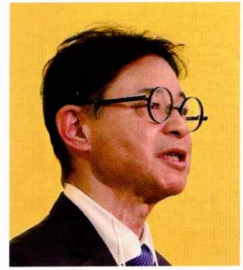
第66回甲府中学・甲府一高東京同窓会が、当番幹事の皆様並びに役員の方々のご尽力により、「同窓生、その窓がひろくとき。」のテーマのもと、盛大に開催されますことを心よりお慶び申し上げます。

同窓会の皆様方には、日頃より母校の教育活動に対し、深い御理解と御支援を賜り、衷心より感謝申し上げます。

さて、本校は創立146年を数える、県下で最も長い歴史を有する高校であり、これまで多くの有為な人材を輩出してまいりました。この伝統は、同窓会の多大な御支援のもと、教職員・生徒が日々新たな決意のもとにたゆまず努力し、学び続けてきたことの積み重ねによるものであります。

近年におきましても、英語教育の充実や、国際的に活躍できるリーダーの育成、さらには地域や世界との連携体制の構築など、時代に即した先進的な教育を推進し、着実に成果を上げております。加えて、現在の学びの中心である探究活動においては、県内で初めて探究科を設置するとともに、その成果を普通科にも波及させ、探究を軸とした教育の充実に努めております。「世界に漕ぎ出す知の冒険者たれ」を目指す生徒像に掲げ、生徒一人ひとりが自ら課題を見出し、その解決に果敢に挑む姿勢を育んでおります。

結びに、同窓会の皆様におかれましては、今後とも変わらぬ御支援、御協力を賜りますようお願い申し上げますとともに、東京同窓会の益々の御発展と、皆様の御健勝を心より祈念いたしまして御挨拶いたします。



いあつわい

東京同窓会

令和8年度

実行委員長

古屋 高一

第66回甲府中学・甲府一高東京同窓会開催にあたり、当番幹事を代表してご挨拶申し上げます。この一年余り、役員の皆様には多大なるご助力を賜りました。心より感謝申し上げます。さらに同窓生の皆様からも温かいご支援を頂いたこと、厚く御礼申し上げます。

準備を進める中で、皆様から多くの励ましを頂きました。それは強行遠足の際、沿道からOBの方々にかけて下さった声援のようで、暗さと孤独の中で再び力が湧き、一歩踏み出すことができたまさにあの時と同じ感覚でした。そして先輩方のみならず同級生や後輩にも支えられ、無私なる仲間を再び得られたのも大きな喜びです。

本年度のテーマは『同窓生、その窓がひらくとき』です。故郷を離れ慌ただしい日々を過ごす中、ともすれば母校での日々を忘れかける事もある私たち。しかしある瞬間、まるで窓が開くように、卒業生としての自覚と誇りがよみがえる。あの日校舎の窓から仰いだ富士のように、それは大きく鮮やかな記憶として。本テーマにはその瞬間への思いを込めました。

至らぬ点もあるかと存じますが、同窓生の皆様が心の窓を開け放ち、旧友との語らいを楽しみ、「来てよかった」と感じて頂けたなら、準備に携わった私どもとしてこれ以上の喜びはございません。

結びに、同窓生の皆様のご健康とご多幸をお祈り申し上げますとともに、東京同窓会が末永く継続していくことを祈念いたしまして挨拶とさせていただきます。



content

特集 同窓生の強行遠足

特集1 強行遠足の舞台裏

特集2 40年目のひとり強行遠足

特集3 灼熱の時代

特集4 最終走者

特集5 強行遠足を鼓舞する！

湘南同窓会に参加してきました！

『おおぞら共和国』が生まれるまでの物語

甲府一高を卒業して思うこと

応援団の若きOBたち

首都圏甲府会へ行ってきました！

日新鐘に寄せて

一紅会春の講演会レポート

一高の一年

同窓生寄稿「私と一高」



TOKYO
2026
甲府中学 甲府一高 東京 同窓会
同窓生、その窓がひらくとき。

32 28 27 26 25 22 19 18 17 16 15 12 8 5 4

特集

同窓生の強行遠足

私たちの心に深く刻まれている強行遠足は、卒業し時を経ること、ますますその経験が生きてくるように感じる。今回の特集は「同窓生の強行遠足」をテーマに、強行遠足経験者であり運営責任者でもある花輪先生のお話から、松本大町ルート時代を駆けの大先輩へのインタビュー、40年目にふたたび踏破した記録、同窓生による最終走者への伴走、そして應援団OB有志による沿道応援レポートをお届けします！

あの道を越えて、今がある。それぞれの強行遠足



特集1

強行遠足の舞台裏

運営責任者、花輪先生に聞く

花輪先生に聞きました！

開催回数97回、100年を越えるその歴史。強行遠足は一高の歴史と魂そのものといつてよい。最長不倒距離167kmの伝説をはじめ、多くのエピソードがある一方で、運営している裏方の存在はあまり語られてこなかったように思う。

夜を徹する長丁場、一般公道を男子で104kmという距離、2県9市町村にまたがるスケール。公立高校が開催するレベルを大きく超え、しかも100年以上続けているのだ。これは歩く生徒も大変だが、運営も同じくらい大変なはず。今回はこのビッグイベントを取り仕切る責任者、甲府第一高等学校体育振興主任、花輪秀剛先生にお話を伺った。

生徒数より断然多い運営参加者、そして準備には半年間も！

まずは運営参加者の人数について伺った。驚くことに生徒より多いのだ。

「令和7年の運営参加者は1093名です。生徒数が現在600と数十名なので（令和7年5月現在644名）生徒より多いですね。内訳は、職員62名、PTA567名、同窓生と前年度卒業生がそれぞれ299名と102名、そして医療関係者63名です。医療関係者は同窓生、保護者に加え看護協会様からもご協力いただいています」

令和7年度の運営参加者

職員	PTA	同窓生	R6 卒生	医療関係
62	567	299	102	63

総勢 **1093** 名

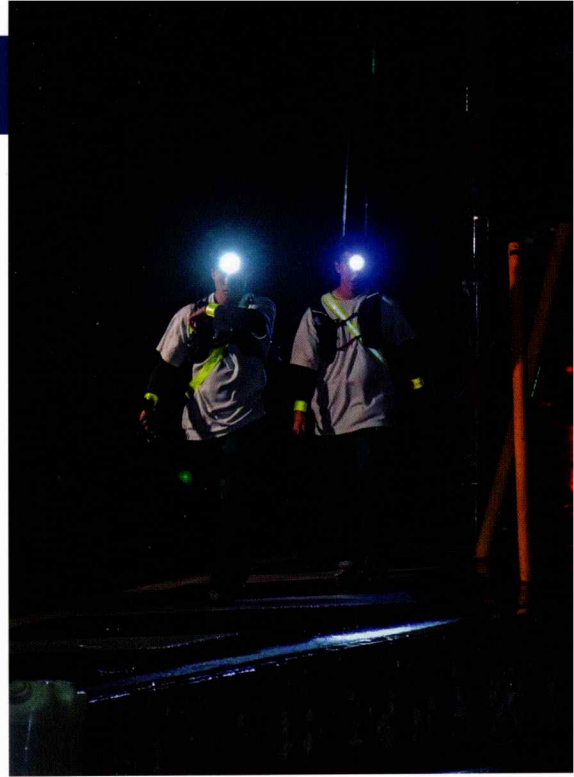
それだけの人数を集めるのはさぞや大変だと思うが、特に保護者の皆さんは積極的に参加されているという。

「6月ごろからPTAへの呼びかけをはじめます。保護者の方の参加は昨年567名なので、生徒数の概ね90%の方に参加いただいています。ひと世帯から2名の保護者様に参加いただくケースもあり、同窓生の協力者も含めまして、安全確保のため皆様にお手伝いを多数いただいています」

PTAからの参加者の多さは、この過酷な挑戦がしっかりと保護者に理解されている証だと思う。その年の強行遠足実行委員会発足が4月。都合半年続く準備はどんな風に進むのだろうか。

「まずは脚気石神社で安全祈願をしてから活動を開始します。5月にはコース視察と、検印所に使わせていただく施設や自治体へ挨拶にまわります。今年は清里での施設が営業中止になるとのことで変更の予定です」





道路状況は毎年少しずつ変わるので、細かに調査してのコースのアップデート。また利用施設の状況についても確認は欠かせない。

「コース確認では工事などあれば状態や時期などをチェックします。原則歩道を歩くよう設定するので、道路横断箇所など細かに設定しています。誘導者が多数必要なため、協力者の数が多い理由でもあります。生徒の安全がなにより第一なので。また安全対策としては、7月から8月には心肺蘇生講習会を行います。PTAと職員とで、消防署にお願いして実施します」

今回の取材で何度も伺ったのは「生徒の安全確保」。多人数体制も心肺蘇生講習も、平成14年の事故の教訓であることは言うまでもない。安全のため行事自体を止めるのではなく、生徒も保護者も教員も同窓生も一丸となって前進するのは一高ならではの姿だ。

そうして夏が終わる8月から9月にかけて改めてのコース確認と、その間に伸びたコース上の草刈りが行われ、実施前の9月に保護者・職員による合同会議を経たら、いよいよ実施という段取り。半年の間にやるべきことは多い。なにより生徒の安全を最優先にした計画スケジュール。そして関係各所への挨拶回りを最初期に行うところも、沿道各地の理解と協力で支えられている強行遠足ならではのほう。

それにしてもこれだけの準備を毎年行っている運営と、普段の校務を勤めながらまとめていく花輪先生は凄い。それも強行遠足でこ本人が限界に挑んだゆえと思うと、まさに一高魂の発露だと思う。

いよいよ実施当日

「実施当日は朝9時より、同窓生、PTAの代表者とともに天候判断のための判定会議を行います。明らかに問題なければ会議を開かないこともありますが」

とはいえここ数年強行遠足は途中雨に見舞われるケースが多いようなので、きわどい判断が求められているだろう。そして実施と決まれば動きは早い。花輪先生「本人は総責任者として運営側の協力者たちを持ち場へと送り出し、当日14時の男子生徒出発を見送ったところで長野県小海町へと移動。そこから長い夜が始まる。」

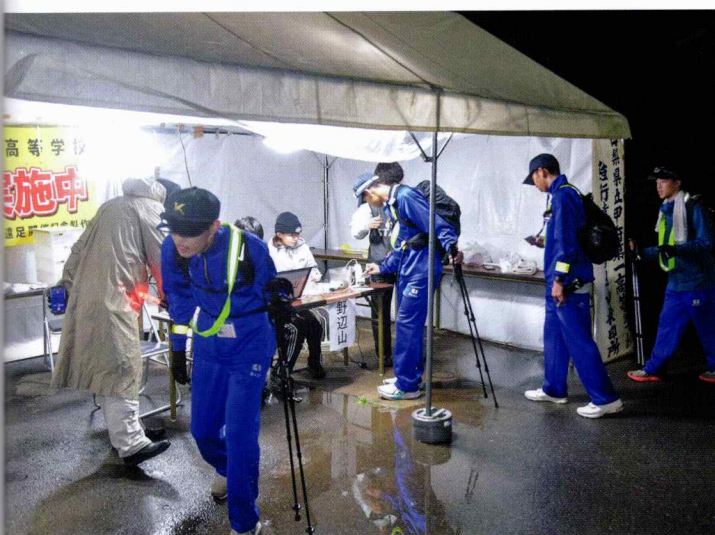
「私自身は、本部のある小海の総合センターにいます。19時に本部を設置して以降主にトラブル対応をしています。トラブル内容としては、生徒が身分証を落とすケース、コースの間違い、コース上で止まっている生徒の安全確認、などのトラブルに巡視車を手配したりの対応。外部

からの連絡やクレーム情報についても小海の本部でまとめ、対応しています」

104kmの全コース上で起きたトラブルはすべて花輪先生のもとに一報が入り、その都度対応していくという。そして予想外の出来事はトラブルだけでもないという。

「前回、岩村田にお住まいの方がご自身の家の前で飲み物などを提供したいとお申し出をいただいたのですが、衛生管理などの問題から有難いながらも断りをしました。でも沿道の方が良く思ってくださるのは励みです」

「実施当日は生徒の安全確保が第一。道路上の危険箇所把握はもちろんですが、近年気を付けているのは熊対策です。熊用スプレーの巡視車への装備、鈴の携行、そしてコース上で目撃情報が出た場合は中止と決めています」





そんな過酷な強行遠足。特に男子は夜間に入り、多くの生徒が野辺山を越える時間帯から同時に離脱者も増えてくるのは、かつてこの道を歩いた経験者たる同窓生の皆様ならわかりだろう。男子最終走者がゴールする翌日の昼、さらに女子の終了まで、本部の小海から対応するのである。最終走者が通過した検印所は順次撤収していくが、本部小海が撤収し、記録を集計してその日の業務のすべてが終わるのは20時ごろだという。本当にお疲れ様です。

運営管理のやりがい、そして生徒たちへ

先生ご自身が現役のころも無論のこと生徒たちは必死になっていたはずだが、今の方がより自分自身の限界へ挑んでいく生徒が多いと感じるという。

「強行遠足自体を盛り上げようという意識もいまの生徒たちには強いようです。唯一無二の行事という意識があるのかもしれない。生徒会からお守りの作り方プリントが配布されたり、事前にコースを下見した生徒がSNSで共有したり、男子の出発に女子が応援グッズで盛り上げたりしているようです」

毎年本当に苦勞をされている強行遠足の運営。そのやりがいはどこにあるのだろうか。

「自分も経験しているので、生徒には困難に立ち向かう体験をしてほしい。そのために余計な心配をせず、この行事に臨めるように準備をしています。つらいけれど歩行を諦めず続けようとしている生徒の姿を見たときに、だからやりがいを感ずります」



花輪 秀剛 先生

甲府第一高等学校平成13年卒、現役時代はアーチェリー部所属、現在は母校一高で体育振興主任を勤める。

ご自身も経験しているからこそ、生徒への共感。生徒が困難へと立ち向かう得難い体験のため、準備する。それそのものがやりがいなのだ。辛さをおして歩き続けようとする生徒の姿は、この仕事のやりがいを象徴しているのだろう。

最後に先生の現役時代のエピソードをひとつ。強行遠足のゴール後、帰りの小海線に乗ったら直後に意識がなくなり、気づいたら電車を下ろされ駅のホームで寝かされていたそう。そんな過酷な強行遠足を体験してきた先生だからこそ、生徒たちをしっかりと導いてくれるのだと思う。先生これからもよろしくお願いします！

(聞き手・構成：杉浦昭太郎)

40年目のひとり強行遠足 ——— 57歳「4度目」の挑戦

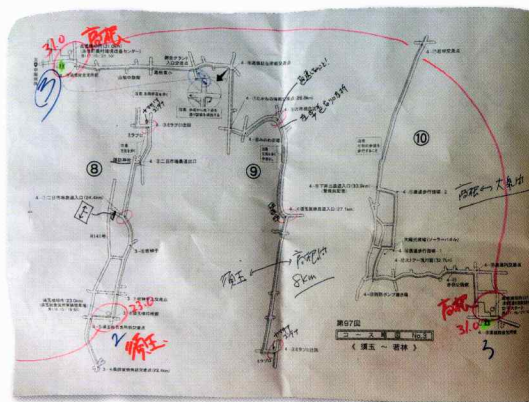


なんのために？そんなことはわからない。しかし歩くのだ。
人生の後半に向け、一高生としての自分を再発見した歩行の記録。

今年の東京同窓会のテーマは一高生の自覚。同窓生として「窓」を開き、改めて一高生たる自らに問いをかける。であればやることは一つしかない。強行遠足のあの距離をもう一度歩くのだ。

だができるのか？可能性は、それは歩けば分かる。最初から結果が分かっていたら挑戦ではない。強行遠足とは「できない」の結果ではない、まず「やる」の一択なのだ。むろん準備はした。なにせ肉体はあの日から40年も経ったポンコツなのだ。事前のトレーニングは当然のように行った。安全確保のため出発時間をずらしもした。それでもどこか「賭け」のような気分はある。

実はOBによる再踏破はこれが最初ではない。2018年には一高OBの朝日新聞記者、田中啓介氏が同行取材をしている。しかし今回僕がやろうとしているのは単なる自己満足だ。自覚云々言いながら、自覚の本体を自分でもよくわかっていない。だがもう一度歩けと魂が言っていた。あれから40年を経た2025年11月1日、むしろこれは「なんのために」の答えそのものを探す旅になるだろう。



ルートの要所をメモして携行

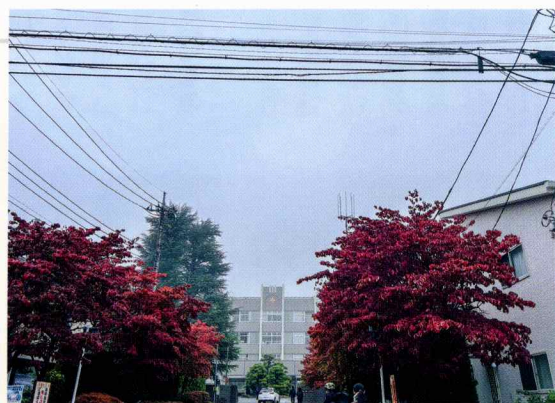


08:10 甲府一高



今回はトレランスタイル

前夜までの雨は上がったものの霧のスタート。強行遠足は本来14時スタートだが今回は朝8時とした。サポートのない単独行ではリタイア時の帰路の確保が難しい。中間地点野辺山を撤退判断ラインとし、確実に帰路を確保できる時間を考えての朝スタートだ。ゆえに霧の中を歩いている。当時のスタイルは白ズボンに学生服。今日はトレランスタイルなので当時より格段に動きやすいが、あの微妙なスタイルも忘れがたい。霧はやがて晴れ、鳳凰三山が雲間に顔を出す。



スタートは霧

10:09 荊崎



スタートから2時間はペースをつかむための歩行に終始。1kmで10～12分のペースを維持できれば21時間で小諸に着く計算だ。だがここから登り勾配。野辺山で脚を残しておくためにもオーバーペースには注意したい。



12:05 須玉

小諸まで70kmの標識を発見。国道141を素直に行けば70kmだがルート的には残り80km程度か。11月だが思ったより暑い。そして思ったより腹が減る。行動食の減るペースが早いので高根付近で最初のコンビニ補給を行った方がよさそう。高根へ向かう道からの富士が実に優美で慰められる。



その遠さにクラクラくる



13:29 高根

たんぱく質補給のためコンビニでチクワを購入した。その後は複雑な裏道をいく公式コースは使わず幹線を選択。一部歩道が途切れるが、土地勘がないので仕方がない。幹線避ける公式コースは、おそらく車道の路側帯を歩かせないためだろう。生徒の安全が全てに優先される強行遠足の考え方がコースに現れている。そんなコースも甲斐大泉への登りがこたえはじめたが、しかしまだ八ヶ岳越えは序盤も序盤、気合を入れていく。



高根より富士山を望む



15:11 甲斐大泉



甲斐大泉でペースを下げる

予想よりも早い。そしてそれはまったく喜べない。オーバーペースだ。目的はタイムではなく完走なので、帰還不能地点である野辺山以遠でリタイアしないよう戦略的にペースダウン。脚ダメージの兆候は既にあるので、なんとか残したい。そして夕方が近づくと気温は低下。タイツとアームカバー、手袋を装着し、いよいよ八ヶ岳越えに入ったところ、「まきば公園」でまさかの雨。11月、しかも全行程最高地点で雨とは。軒下を借りてレインウェアを着る。内も外も、コンディションは良くない。



沿道の花

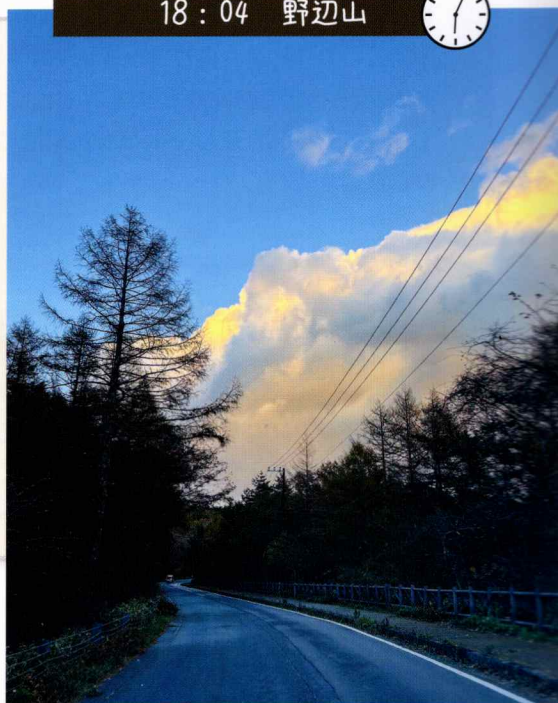
八ヶ岳を下る道で雨は止み、高原地帯の美しい夕焼け。しかし気温はさらに下がってきている。それに日の短いこの時期の午後6時はもう夜だ。ヘッドランプの灯りを頼りにたどり着いた中間地点、あの日野辺山にはシジミ汁の振る舞いがあったが、今日は一人だ。待ち受ける人の誰もいない中で、行くか戻るかの撤退判断を行った。

残り52km、行けるだろうか？脚は続くか？しばし逡巡し「続行」と自分でも思いのほか大きく声に出した。ここまで来た以上行く。コンビニでカップラーメンを食い、海ノ口へと向かう暗い道に踏み出した。沿道の寒暖計には摂氏6度とある。

ハヶ岳高原で日没



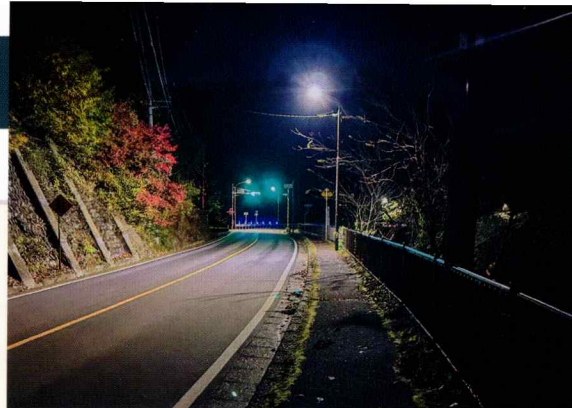
18:04 野辺山





20:24 海ノ口

海ノ口までの道はただただ暗い。十三夜前日の月だけが空に煌々とあり、世界にただ一人だけになったようだ。道の暗さに比例し、次第に重くなる脚に力を入れすぎないように、抜きながら歩く。昨日の雨でできた水たまりにはまった。



ひたすら歩を進める夜間

22:13 小海



学生の時もそうだったが、この付近の記憶があまりない。変わり映えしない単調な道と夜の静けさで、憶えるべきことがないのだ。今回もそうだった。はるか遠くの点滅信号がかもす真夜中の空気感に学生時代の記憶が蘇る。あのとき共に歩いた友はどうしているだろうか。今はただ月だけが明るい。



静まり返っている小海検印所



23:40 佐久穂



佐久穂付近

なんのために歩くのか。真夜中、不思議と冴えた頭でそんなことをずっと考えていた。車もこの時間はほとんど走っていない。ポケットからキャンディーを取り出す。あの日もお守りの中の飴玉を嘗めていた。ほんとうにみんなどうしているんだろうか。自分だけ40年前に戻ったような不思議な隔絶感のなか、ひたすら歩を進めた。

00:59 臼田



残り20kmほどか。一年生のとき臼田で爆睡し、結局岩村田でリタイアしたことを思い出す。そうか、僕は強行遠足を2回しか完歩していないのか。ならばこれを3回めにすればよい。臼田検印所近くのコンビニで再びカップラーメンを食うが、たった15分ほどの休憩で脚の筋肉が固まる。いよいよ脚に来ているが、ジョグも交えてだましだまし、トレランと同様にいろんな筋肉を使いながら進む。



臼田での補給休憩



02:15 中込 ~ 03:20 岩村田

全区間でここ、岩村田へ至る道が実はもっとも過酷な気がする。後半に行くにつれ区間距離は短くなるもの大してラクにならない。臼田・中込から岩村田へ続く果てしない直線に、学生時代は心折れそうになった。今回もさほど余裕はないが、それも含めて予定通り。沿道でストレッチをしながら、残り10kmを切ってからが本番と言いかせる。初めてこの道を歩いた一年生の時に前進停止を食らった岩村田は静まり返っていた。

04:16 三岡



いよいよ仕上げだ。脚はきついがなんとかペースは維持。三岡から小諸まではあの時代のコースと異なるが、昨年の小諸検印所担当として最終走者を伴走したので道はわかる。たかが4キロ。最後だからと格好つけてジョグで、だれも見えていない道を走った。自分の靴音だけが響く小諸の街。待ちに待ったゴールが見えてきた。

05:07 小諸

まだ暗い夜明け前、無人の小諸懐古園。時刻は午前5時7分。あっけなく、なにごともない。達成感はあるけど、思った以上に世界は変わらず。振り返っても懐古園の門はただそこにあり、うっすら白い自分の息だけがこの世界で唯一動いている。

歩ききったところで世界はなにも変わらない。感情の爆発もない。けれど自分の奥にある何かが、ごく静かに、ほんの少しだけ動いた感覚がある。あるいは安堵か、自信のようなものか。不安はあったものの達成できると正直思っていたし、ペース配分も前進判断も我ながら完璧に近かった。脚のダメージも含めて予定通りのことを予定通りやっただけだ。だが来ている、じわじわと。

強行遠足を再度歩く理由として「魂が言っていた」と冒頭書いたが、やはりそれこそが僕が一高生である証なのだと、きわめて当たり前のことが、完走したいま改めて傷んだ身体に沁みている。強行遠足とは人生へと挑み続ける魂の錬成なのであり、それは今回も確かにあった。

57歳。人並に人生の労苦を乗り越えてきたそれらが、あの日歩いた厳しい道のりと心の中で合致している。強行遠足は卒業してから効きだす魂の時限スイッチなのだと今ならわかる。

人生100年と言われて久しいこの時代、むろん僕が100歳まで生きられるかなどわからない。けれど人生の中間地点は確実に過ぎただろう今、再び歩き出すための力をこの道から改めて貰えたと思う。夜の野辺山、残り52kmの中間地点で「続行」と決めた瞬間は、僕という人間の、その後半戦にかならず力になると確信できる。世間の中で錆びついた一高魂の、そのいくらかも磨かれたと信じた。

すっかり中高年であるところの僕でさえこうなのだ。高校生にとってこの体験は劇的だろう。挑む心を呼び起こし、困難に立ち向かう力を与えてくれるこのかけがえのない行事と道のりが、いつまでも続くよう願っている。

強行遠足をはじめた遠い先輩方、いままで走りぬけてきたすべての一高生、支え続けてくれたすべての諸先輩、先生方、保護者の皆様、沿道の人々、それら連綿と続く魂の末端に、僕もまたぶら下がっている。感謝を捧げながら、小海線の中でいまは少しだけ眠ろうと思う。



懐古園到着は午前5時

挑戦した者

杉浦 昭太郎(昭和62年卒)

現役時代は應援団と美術部。現在は都内のデザイン会社役員。ロードとトレイルを月間150kmほど走っている。



灼熱の時代

松本の先へ昭和20年代の強行遠足

一高の強行遠足が小諸を目指す佐久往還になる前、24時間で可能な限り遠くを目指す松本大町ルートの時代があった。昭和32年に岩間孝吉氏が達成した最長距離もこのルートで、その距離167km。

だが記録によると、それ以前の昭和27年でもトップは157km地点の木崎(※1)まで到達しており、他に153kmの信濃大町到達なども目に付く。岩間氏の記録は途方もないが、同時代の少なくない生徒たちも150km超えを競っていた、まさに灼熱の時代。

今より道路事情の悪い昭和20年代、どこまでも進もうとしていた、強行遠足灼熱の時代を歩いた大先輩に話を聞いた。

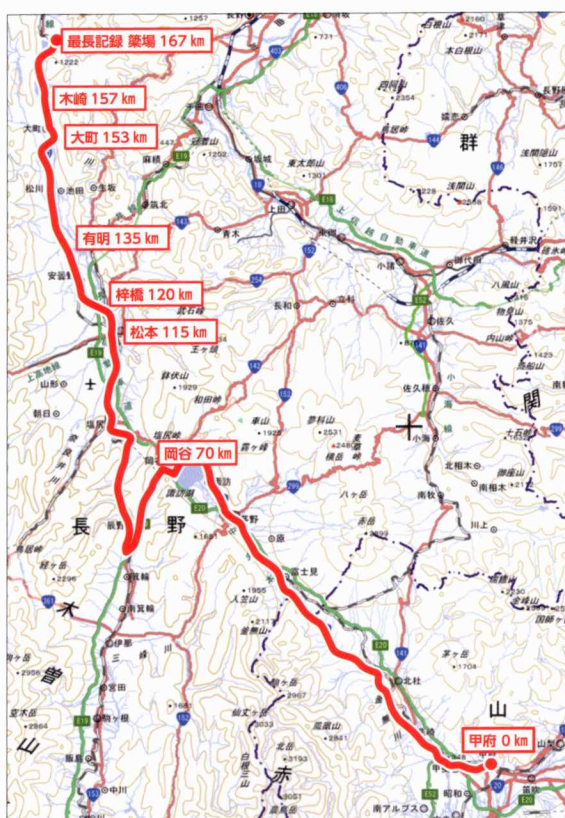
小泉敦夫さんは昭和11年生まれ、一高は昭和29年卒。証券会社を勤めあげた後も引退せず、倒産寸前の電子会社を買取り復活させたという経歴の持ち主。ご高齢にもかかわらず現在も会長として精をだすそのバイタリティを培ったのが強行遠足なのだという。昭和20年代当時の様子を伺うと、現代の強行遠足とはまた異なる景色が浮かび上がる。

「当時の足持ちはわらじ。わらじを腰に三つくらい、握り飯とぶら下げて歩いた。昔は砂利道だから、わらじがよく合ったんだよ」

甲府から諏訪方面は、八ヶ岳と南アルプスに挟まれ諏

訪口と呼ばれた地。甲斐の俳人、飯田龍太も詠んだ甲州・信州への原風景の中を、わらじ履きで歩いた。

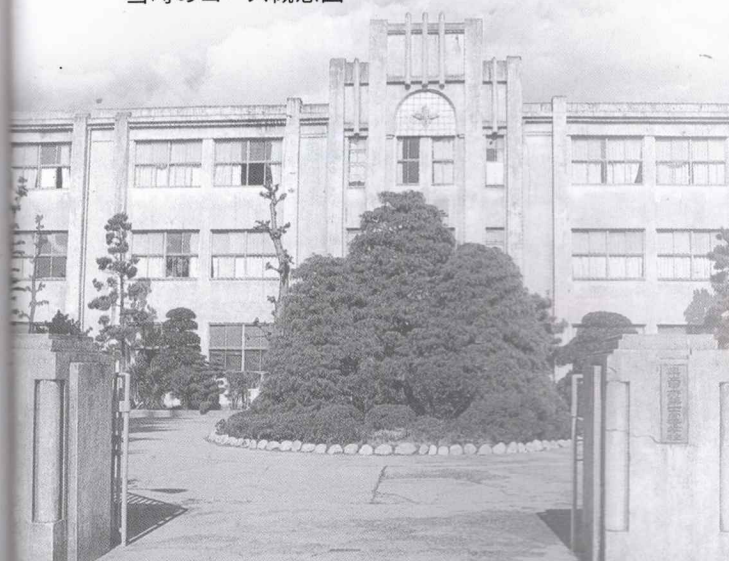
「今は岡谷から塩尻峠を抜けているけれど、当時は天竜川沿いに辰野まで南下して、それで小野・塩尻と北上した。でもその辺は夜中だったから半分ぐらいいは寝ながら歩いていたら、寝ながらだから下手すると天竜川に落ちちゃう。道端の草むらからもう川だから。はっはは！」
「街灯なんかなくて、よくみんな迷わなかったな。懐中電灯も持たなかった。当時強行遠足は11月3日って決まっていたの。この日は晴れるから、だから月も明るかった」(※2)



当時のコース概念図



かっこよく矍鑠とした小泉先輩





昭和28年の出発風景

昭和26年11月、月夜の中を歩き通した最初の挑戦。小泉さんは一年生ながら松本の先、約120km地点の梓橋まで到達する。24時間で行けるだけ行くルールではあったが、まず松本の目安はあったようだ。松本は甲府から約115km。この時点で現在の終点小諸より遠い。

「塩尻からは平坦になるけど、なんせ遠い。なんとか松本まで着いても殆どの連中がそこで落ちちゃう。松本までいくとメダルがもらえるから、まずみんな松本を目指してね。それで松本駅で一高の生徒がゴロゴロ寝ていた。でも私はね、なんとか松本から先へ一つだけでもいいから行こうと。もうきつかったけど、それで一年生の時は梓橋

まで。大糸線に沿って歩いた」

小諸ルート世代には梓橋の地名は馴染みないが、小諸よりも15km以上先と言えば距離感はあるだろう。そんな、時代も風景も今と異なる昭和20年代の強行遠足だが、今につながるあの風習が始まったのもこの道筋にあったようだ。

「学校がね、岡谷でしじみ汁を出してくれたんだよ、諏訪湖にしじみがあるから。それが旨くてさ、だからダウソウするやつが多かったのよ。ホッとしちゃってバタツと数へる。でもそこを超えると結構いけるもんでね」

諏訪湖のしじみは現在ほぼ絶滅状態だが、当時は地域の漁業資源だった。小諸ルートの野辺山と同じく松本までのおおよそ中間。中間地でしじみ汁を振舞う風習が今に至るまで続いているのは感慨深い。さて一年生で120kmを踏破した小泉さん、その後もチャレンジは続いていく。

「二年生の時は梓橋より先の有明まで行った。松本から2〜30kmくらい先まで行けたから、じゃあいいよ三年生で大町を超えてやろうと思ったね。その頃の記録で大町の先の木崎まで行ったのがいて、それが一番だったから私もなんとか最後は大町の先に行こうとしたよ」

「木崎まで行ったのは一学年先輩の今福って人。途中で車かなんか乗ってたんじゃないかってみんなで言ってたよ、ははは！」

木崎157kmは、後年岩間氏が167kmを達成するまでの強行遠足最長到達記録である。大記録に感化されるように、小泉さんは最後の年に大町の先を目指す。だがそこで頑張りすぎてしまった。



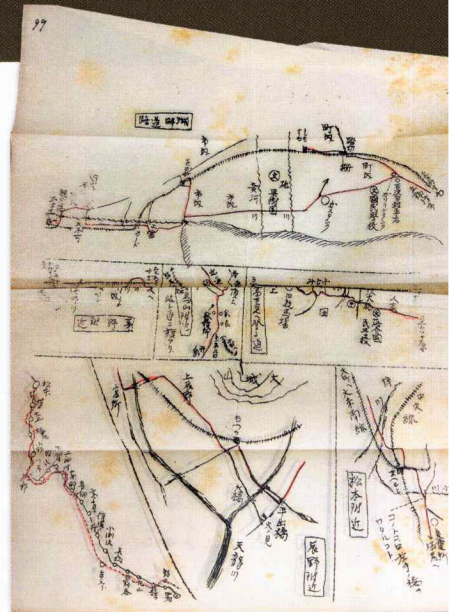
篠原校長による号砲(昭和25年)

「24時間で大町超えるにはもう走るしかない、歩ってたんじゃないけども着かないから、一高から走って走って国界橋まで。そしたらその辺りのおばさんが親切で、味噌汁やなんかくれるんですよ。それで休んじやつてね、おばさんに『腰を下ろして』なんて言われたもんで、誘惑に負けて」そしたらもう、足が痛くて動けない。だから頑張りすぎて岡谷で終わり。上諏訪の叔母さんの家で温泉に入って翌日のんびり帰ってきましたよ！木崎まで行つてやろうと思っただけだね！」

残念ながら岡谷でリタイアした小泉さん。それでも温泉に入り翌日帰宅とは自由な時代だったと思う。そして長野の人の優しさ。今でも強行遠足は沿道の方々の理解と好意で成り立っているところが大きい。当時からそうだったのだ。

「長野の連中が親切でさ、一高の生徒がこの日歩いてくつて知ってるわけ。それで向こうの学生が『頑張ろうぜ！』なんて励ましてくれる。あれもいい思い出だね」

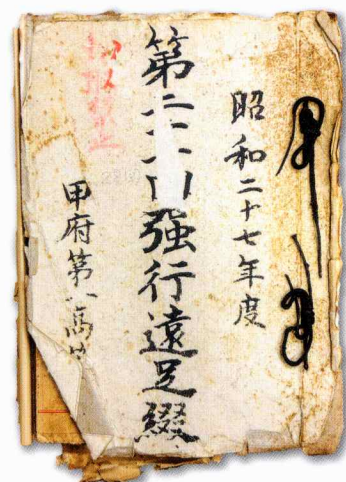
そんな強行遠足は小泉さんの人生を形作るなかでかけがえのない思い出、そして指針のようになっていった。



当時から精密なコース図が用意されていた



松本に到着し生徒たち(昭和23年)



小泉さんも走った昭和27年当時の記録は一高に今も残る

「生物の島田先生っていうのが当時いてね、強行遠足は『ガンバリズム』だつて言うわけだよ。身を以て体験したね、ガンバリズムを。それがあから本当に人生で大変な時をなんとかできてきた」「きつかったけど今にしてみれば、一生の思い出だよ。本当に頑張ったから、なにしろ苦労した時に思い出したよね、会社潰れそうな時とかね。なんせ体の限界まで挑戦したから。強行遠足ってのはいい教育だと思うよ」

では小泉さん、最後に在校生へ、そして後輩OBへ、一高を卒業した多くの方へ一言！

「高校はさ、どうせ行くなら一高がいいよ。強行遠足もあるし、東大入る奴もいる。ガンバリズムだ。クラーク先生もいる！誇りを持つて！」

先輩ありがとうございます。そして小泉先輩はじめ松本ルートを歩いた一高の大先輩方、強行遠足で培った心と身体で、いつまでもお元気でいてください！

(聞き手・構成・杉浦昭太郎)

(※1) 当時も道路事情によってルート変更があったと思われるが、甲府からの距離は概ね松本115km、梓橋120km、有明135km、信濃大町153km、木崎157km。岩間氏の記録である167kmは青木湖の先、築場である。

(※2) 11月3日は晴天の特異日。同日は旧明治節でもあり、強行遠足はその明治節における運動奨励がはじまり。ちなみに昭和27年11月3日の月齢は15.2でほぼ満月。月の出は17時19分なので一晩中月は輝いていた。

特集4

最終走者

強行遠足最終区間、小諸まで4kmのドラマ

第96回強行遠足。OBボランティアとして私たちの学年は、一高生にとって特別な場所である小諸検印所を担当した。

真夜中の小諸懐古園で準備を済ませ配置へ。まずは夜明け前の冷たい空気の中、ひと桁台の走者を誘導し、一旦仮眠のために検印所へと戻った。

検印所二階では同学年62年卒の級友たちが何人も仮眠をとっている。2時間おきの交代制で、最終走者がゴールするまで任に当たるのだ。

その最終走者を一つ前の三岡から小諸まで伴走する役を今回仰せつかった。同じく伴走者である級友と三岡へと向かったのは午前10時半ごろ。小諸に着いて既に12時間以上が経過しているが、生徒たちはもともと長い時間歩き続けている。

強行遠足は昔から前進停止の判断が厳しい。私も現役の頃に岩村田で前進停止を食らった苦い思い出がある。だから制限時間が迫る中、生徒たちが全員無事通過できるのか気がではなかった。



最終走者を待つ懐古園のゴール

そうして前進

停止10分ほど前、最終走者が現れた。青いジャージは2年生。三岡からさらに一つ前、岩村田からの伴走者に付き添われ、ゆっくりとだが懸命に歩いてくる。そして無事三岡を通過。この区間の脱落者はこれで

ゼロ。次は我々が無事にゴールである小諸まで時間内に送り届けなくては。

小諸までは4km。普通に歩けば1時間だが、ここまで100kmを歩いてきた脚は悲鳴を上げているだろう。聞けばテニス部所属という彼の気を雑談で紛らわせながら、一歩一歩、なんとか時間内でゴールできそうなペースだと確認できたところで、前方に生徒が一人佇んでいる。緑のジャージは3年生だ。どうやら前の走者に追いついたようだ。

それで気力が復活したのか、2年生の彼はやおらペースを上げ、そのまま3年生を追い抜いていってしまった。

ゆえにこの3年生が最終走者になる。2年生の彼を見送り改めて伴走するが、既に心が折れかけているのか、ここまで来てリタイアまで口にしていた。時間的にもギリギリ、三岡を時間内通過しているので多少オーバーしても完走になるのだろうか、やはり時間内ゴールを目指したい。我々は再度一歩一歩、小諸を目指した。

あと少し、もう少しと、地図と時計を交互に見つつペースを保ち、時間内にゴールできるようカウントする。沿道では誘導のため待機している級友たちが精一杯の応援を彼に届けてくれる。そして地元の方も。甲府から歩いてきたのか！がんばれよ！と。

思いが通じたのだろうか、ペースを回復した3年生は本当に最後の力を絞り切り、制限時間2分前に無事小諸にゴールした。

その瞬間、その顔のすがすがしさ。

私が強行遠足を歩いて40余年、変な話ではあるが、その瞬間に、自分自身が40年かけてこの道を歩き、ようやくゴールできたような、そんな気がしていた。

最終走者の3年生はしきりに我々に礼を言ってくれたが、礼を言うのはこちらの方だ。なにせ君たちのおかげで、この強行遠足という舞台を40年かけて遂に全うできたのだから。

三岡小諸間をともに歩いた最終走者のふたりとも、もう一高を卒業しているだろう。しかしこの道で死力を尽くし、限界の先へと歩んだ体験は、人生のあるとき君たちをきつと助けることになるはずだ。それは約束できる。

この極端で素晴らしい体験を通じ、その後の人生にひとつの魂を宿してくれる強行遠足がずっと続いていくことを願っている。最終走者は最後を走る者だが、決して諦めない者でもあるのだ。

第96回強行遠足小諸検印所伴走者

久保島、杉浦(杉浦 記)



特集5

強行遠足を鼓舞する!

應援團OBによる沿道応援

2024年秋、その年の強行遠足で沿道応援に参加した直接のきっかけは、應援團の小林先輩からの声かけでした。應援團OB会でも、強行遠足へ応援のためにOBを派遣してはどうかという話が出ていましたし、だから実際の計画を伺ったときは「ぜひ」と思ったことを憶えています。

私は平成30年に卒業しました。應援團の後輩には令和2年卒が1名いるだけで、それ以降、現役は途絶えている状態です。毎年の応援練習などは生徒会が中心となって進めてくれていると聞きますが、やはり「團」として応援することで、應援團の存在を知ってもらい、少しでも心を奮い立たせてほしい、その一心だったと思います。

参加したのは應援團OB6名。一高の顧問の先生に相談し、学生服や団旗などを借り受け、運搬しました。御崎神社に参拝してから甲府を出て、八ヶ岳のまきば公園へ、ここは毎年吹奏楽部OBORGの皆さんが配置についている所で、彼らと協力する形で我々も応援をすることとなりました。

実施にあたっては應援團の先輩方が休憩用のテントや、暖をとるためのストーブの用意、その他食料品などの補給をくださり、先輩方がいらっしやならなかったら大変な事になっていたと思います。改めて應援團のつながりを感じるとともに、感謝に堪えません。

先頭通過は午後8時ごろ。それ以降やってくる生徒に対し、吹奏楽と連携を取りながら、時に名前を聞いて直接エールを送ったりと応援を続けました。特に直接のエールは、生徒たちは驚きながらも喜んでいて、応援のし甲斐があります。

男子最終が通過する夜半0時ごろをもって、一旦



甲府に撤収。少しの仮眠の後、その日の朝6時ごろにはふたたびまきば公園に集結。女子の応援に入りました。生徒たち同様、我々も寝不足と疲労との戦いですが、そんな中でも我々の応援にこたえるように歩を進める生徒たちの姿が励みとなり、この活動の意義を強く感じました。そして女子最終の生徒の通過をもつての撤収は昼過ぎ。吹奏楽の皆さんともお疲れ様を交わし、ひたすら応援を続けた長い一日は終わりました。

応援を終えて感じたのはとにかく「やってよかった」という気持ちです。私自身も卒業生なのでこの行事の過酷さはよくわかってはいますし、現役時代はこの場所で吹奏楽の先輩による演奏に心を震わせていました。あの時に元気を頂いたように、應援團員としてこんどは後輩たちを応援できればとの思いもあったので、実現できて非常に充実しました。特に孤独な夜の歩行においては、直面する困難にともすると投げだしそうな気持ちになる。そんな時に生徒たちの勇気を鼓舞できたなら、まさに應援團の本望です。

いま現役の應援團は途絶えています。立ち向かう者がいるならば大声で背中を押す、そんな心が一高の中にいまだ続いていることを生徒たちに感じてもらえたら本当に嬉しいですし、願わくば彼らの中から新たな應援團員が生まれることを願ってやみません。

沿道での応援については快く許可を下さり、また多くのサポートをいただいた應援團OBの先輩方、我々の活動を受け入れてくださった母校一高の皆様感謝します。

(岡本友 平成30年卒)

湘南同窓会に参加してきました！

湘南同窓会レポート

湘南同窓会は発足以来回を重ね、今回で27回目。神奈川県西部（湘南）を中心に一高同窓生が旧交を温めるイベント。湘南地域限定かと思いきやそんなことなく、湘南とは別方向の西東京方面にお住いの先輩なども遠くより駆けつけ「一回参加したらはまっちゃったよ～」と相好を崩しながらお話してくださいました。そんな、実に魅力あふれる会なのです。

開催場所は毎年同じだそうで、これがまた素敵でシックな藤沢のクリスタルホテルに併設されている教会。校歌斉唱に続き、会長による開会のお言葉から同窓会はスタートしました。とはいえ堅苦しさも長いお話もまったくなく、ざっくばらんかつスマートに、最年長会員の先輩より乾杯のご発声。そうなのです。湘南という土地柄なのか、色々スマートなんです。なにしろ来場の先輩方はいで立ちがとてもお洒落で、男性の皆様はとてもダンディ。ご年配の方もまったく年齢を感じさせません。

そうしてわれらが東京同窓会の発表時間。宣伝タイムもいただきつつ、今日は来られなかった幹事長、古屋君の力作「母校は今」を全力プレゼン。生徒数が少なくなってもしっかりと県下に存在感を示し、文武にわたって実に優秀なわが母校の後輩たちの活躍ぶりを紹介しました。

歓談の時間はほんとうに楽しく、先輩会員によるクラリネット演奏や、飛び入りでのクロマチックハーモニカなども披露されました。手作りホームパーティーのような、アットホームで和やかな時間はとてもリラックスでき、さまざまな先輩方とおいしいワインを頂きながら色々なお話をお伺いしました。皆様東京同窓会を気にかけてくださり、大変だけどがんばってね、とやさしいお声をたくさんの先輩がくださいました！

最後は応援団出身の杉浦君のエールで締めまして、また来年の再開を約束し、あっというまに素敵な同窓会の時間は過ぎていきました。

この甲府一高湘南同窓会、かつては「甲府中学校」もその名の中に入っていたそうですが、甲府中学校時代の同窓生がおられなくなってから「甲府一高」のみになったということです。ダンディでお洒落な先輩方ばかりなものの、やはり徐々に年齢が上がっていく事を会長は懸念してもおられました。

とても素敵なこの同窓会がこれからもずっと楽しく続いていくように、神奈川方面にゆかりの同窓生のみなさん、是非「甲府一高湘南同窓会」に参加してみてください！ほんとうに楽しいのは私たちが保証しますよ！

詳しくはこちら！▶

<https://ichikoshonan.livedoor.blog/>



2026年4月24日、毎年藤沢で行われている「甲府一高湘南同窓会」へ、東京同窓会の幹事として（宣伝も兼ねて！）私たち62年卒のメンバー3人で参加してきました。



お洒落な先輩方！



先輩によるクラリネットの演奏も



素敵な先輩と記念写真



来年の再開を約束して集合写真

甲府一高
あおぞら会

“あおぞら共和国”が 生まれるまでの物語

● 新生児科医／難病のこども支援全国ネットワーク 理事 小口 弘毅 (S45年卒)

2011年、ある篤志家から難病のこども支援全国ネットワーク(以下、難病ネット)に、山梨県北杜市白州の6000坪の土地が寄贈されたことがすべての始まりでした。難病ネットは、全国の難病児家族会をつなぎ、30年以上にわたり活動を続けてきた団体です。

寄贈の知らせを受けたとき、私たちは胸を高鳴らせながらも、資金の目処がまったく立たず、実現は不可能ではないかと途方に暮れました。それでも、私たちには共通の「夢」がありました。重い病気を抱える子どもたちは、家と病院の往復という制限の多い生活を強いられ、孤独に陥りやすい。この子どもたちが自然豊かな白州の地で家族とともに過ごし、思い出を紡げる場所をつくりたい。それが私たちの願いでした。

高原の風、小鳥のさえずり、夜空いっぱい星。自然の中で五感を育む体験は、障害の有無にかかわらず、その後の成長の基盤になります。

● チャリティーウォークから始まった仲間づくり

広報活動として、難病ネット事務局(水道橋)から白州までの173kmを、4週末に分けて歩くチャ

リティーウォークを実施しました。現在も春と秋に、あおぞら共和国周辺を往復10km歩くチャリティーウォークを続けており、甲府一高同窓生は主にボランティアとして参加しています。

歩きながら、私はふと母校・甲府一高の伝統行事「強行遠足」を思い出し、同窓生の力を借りられないかと考えました。

同窓の故・佐々木まち子さん(湯田小でも同級生)に相談したところ、一紅会で講演するよう勧められ、2013年に「こども達に活かされて(小児科医の夢)」と題して初段階の「あおぞら共和国」を紹介しました。

● 夢が形になっていく

個人や企業からの寄付が集まり、測量・伐採・整地と少



しずつ前進し、2014年には第一棟が完成。その後、宿泊棟4棟、交流棟、風呂棟、キッズボックス(絵本とおもちゃの部屋)、野外舞台が建設され、3000坪の敷地に広い庭を囲むように並びました。隣接する3000坪の森は開発せず、「あおぞらの森」として散策を楽しめる場所になっています。難病ネットはこのレスパイト村を「あおぞら共和国」と名づけました。

● 甲府一高あおぞら会の誕生

講演をきっかけに、趣旨に賛同する甲府一高同窓生が集まり、2014年に「甲府一高あおぞら会」(会長・露木和雄、事務局長・山本秀彦)を結成。年会費3,000円を集めて毎年難病ネットに寄付し、現在の会員数は400名を超え、寄付総額は2,000万円を突破しました。

これまでに、神経発達症から医療的ケア児まで、多様な障害のある子どもと家族2万人以上が宿泊し、友情を育み、明日への希望を紡いでいます

● さらに知りたい方へ

あおぞら共和国の理念や建設の歩みについては、小著『あおぞら共和国物語』(<https://ymkp.net/aozora/>に電子掲載)に詳しくまとめています。ぜひお読みいただければ幸いです。趣旨に賛同いただける方は甲府一高あおぞら会に入会ください。



あおぞら会
Facebook



あおぞら会
図書館紹介



あおぞら会
HP

甲府一高を卒業して思うこと

● 帝京大学医学部皮膚科 名誉教授 渡辺 晋一



高校2年の時に、大学紛争のあおりで、東大の入試が中止になった。翌年には東大の入試が復活したので、私は東大の理科2類に入学できた。高校の頃は学者になろうと思っていたが、大学院に行って博士号をとれても、その後の研究職のポストを得ることは難しいことがわかった。なにしろ私の父は獣医師免許を持っていたが、普通の公務員で、親の資産をあてにできなかったからである。

しかし医学部に進学した場合は、助手になれなくても医師としてのバイトを行えば、生活が

できることを知った。ちょうどその時に国立大学の授業料が月1,000円から月3,000円に値上げすることになり、東大の教養部（駒場）は秋から全学ストライキに入り、すべての授業が休講になってしまった。そこで医学部への再受験を思い立ち、教務課に相談したところ、再受験の際には退学しなければならぬが、不合格だと学生証を返してくれるとの返事だったので、理科3類への再受験を決めた。受験勉強期間は4カ月ほどしかなかったが、運よく合格できた。それでも浪人したことになるため、山梨県立中央病院の院長（東大医学部OB）にお会いして、ご意見を伺ったところ、せっかく医学部に合格したのなら医学部にいった方がよいと言われ、医師として生きる決心をした。

卒業後、どの診療科を選ぶか迷ったが、外科よりは内科に興味があり、検査をしなくてもその場で診断ができ、かつ治すことができることが多い皮膚科を選択した。そして湿疹・皮膚炎と紛らわしい水虫などの皮膚真菌症を診断できれば、誤診することは少ないと思い、入局早々

に真菌外来をお手伝いすることにした。数カ月後に、別の専門外来に移動することを真菌外来のチーフにお願いしたところ、強く反対され、結局一般皮膚科と真菌外来を続けることになった。

その後東大皮膚科の医局長になったが、東大の皮膚科では長年の臨時職員の問題があった。それは大学紛争時代に、皮膚科の臨時職員を正規職員にするという約束を教授がしてしまったことによる。そのため皮膚科の定員を一つ渡さざるを得なくなったが、正規職員になるまでの給料の差額を皮膚科に請求してきた（それも覚書に記載しており、弁護士によると、覚書があると裁判をしても負けるとの答えであった）。しかし差額を払うとなると、医局の財政が破綻する。歴代の医局長はその交渉役を担っていたが、結論はずつと先送りにされ、差額は増えるばかりであった。先輩からは私の代で何とかしろと言われたが、言葉だけで実際に私を助ける人は一人もいなかった。月に一回ほど団体交渉を行ったが、私は一人で相手は5、10人であった。相手から脅されながらもなんとか比較的安い値段で決着をつけた。そのため医局長経験者の先輩から、良くこの値段でまとめたとはめられ、私の後任の医局長からも、先生のおかげでその後の書類手続きはスムーズにいったと、大変感謝された。

その後私の先輩から（前山梨大学学長）から



米国ハーバード大学マサチューセッツ総合病院皮膚科に留学

夜中に国際電話があり、米国衛生研究所（NIH）の皮膚科の先生から日本の留学生を募集したいとの話があり、私を推薦して頂いた。そこで東大の教授に留学のお願いを申し上げたが、ちょうど私が医局長をしていたため、医局長の任期が終わったら、米国ハーバード大学への留学を推薦すると言われた。あとで聞いた話によると、かつて医局長だった先生が医局長の任期途中でNIHに留学したことで、先輩の先生から「医局長は重要な任務を担っている

ので、任期途中で留学させるべきではない」とのお小言を頂いた経緯があつてのことだったようだ。

私が留学したハーバード大学の皮膚科教授は国際的にも有名な方であつたが、定年近くで、私の給料を出せないことがわかり、ハーバード大学皮膚科の次期教授が来日した際に、給料を出してくれないかとお願いした。その結果、私はレーザー研究を行うという条件で給料を出していただくことになった。当時のレーザー治療は、瘢痕などの副作用が多く、問題がある治療法であつたため、がっかりもしたが、他に選択肢がなかったのでハーバード大学のマサチューセッツ総合病院（MGH）の皮膚科に留学した。最初の数ヶ月は研究費もなかったが、新しい教授に私の研究費もだしてもらふことになり、いくつかの動物実験で、アザを治すレーザーの照射条件を明らかにすることができた。

帰国後帝京大学に移ることになり、早速MGHでの実験に基づいたレーザーを東芝メデイカルと共同開発し（特許は東芝メデイカルに取られてしまった）、実際に色素病変の治療を行った。その成果の一つが、太田母斑（アジア人に多い顔の青アザ）をレーザーによって治すというものである。これはZ Eng J Medという世界トップ級の雑誌に原著論文として掲載され、今や太田母斑は治すことができる疾患となった。今になって思えば、心ならずレーザー

治療で留学したが、それなりの成果を挙げることができ、また顔のアザで悩んでいた患者の喜ぶ姿を目にし（今まで顔のアザのため、俯いて歩いていた患者が、前を向いて歩けるようになった）、本当によかったと思っている。また成人後に生ずる太田母斑類似のシミもQスイッチチルビーレーザーで治すことができることを示した。

そして20年ほど前からJICAの依頼で、タイの国立皮膚科研究所（IOD）で東南アジアの医師約30名にレーザー治療および美容皮膚科の講義を毎年8日（計24時間）行うようになった（コロナ禍以降は中止）。タイに行く前に先輩からIODの生徒たちは臨床ができるので、下手な臨床の話はしない方が良くと教えられた。そのせいか、私以外の日本の先生は、研究の話をしているようである。私はレーザー医学と美容皮膚科の話をしているので、生徒からの授業評価は最も高いということである。

バンコクでの講義でわかつたことは、日本の皮膚科治療は、欧米は勿論、東南アジア諸国より劣っていることである。ちょうどタイに行く数カ月前に日本語版の米国医学会雑誌の出版社から、ニキビ治療の総説の日本語訳を頼まれた。英語で書いてあるので、ちょうど良いと思いい、IODで米国のニキビ治療の話をした。しかし生徒は全然興味を示さなかつた。何故ならば、ニキビ治療の標準外用薬は30年前から世界

で使用され、経口避妊薬も普通に使われている。また重症ニキビの第一選択の経口薬であるイソトレチノイン（日本では今でも認可されていない）も古くから使用されていたからである。

また日本国内の皮膚科の講義では、生徒からの質問の多くは試験に何がでるかということばかりであるが、IODでは臨床上必要な多くの質問を受けた。その結果、生徒の疑問点や理解しにくいところを知ることになった（質問は教師を育てる）。その成果が2021年に文光堂から出版された「だれも教えてくれなかった本当のレーザー治療・美容皮膚科治療」という本である。これは学会などで繰り返し返されるフェイクニュースに騙されないようにするために上梓したもので、何が正しく、何が間違っているのかを医学的証拠に基づいて、事細かく記載している。そのため美容皮膚科を標榜している先生には必読の本だと思っているが、今でも学会ではメーカーの利益のために間違えた情報の宣伝をしている。

また私は水虫関連でよくテレビに出演していたので、病院に行ってもよくならないという患者が日本各地から帝京大学皮膚科を受診した。その中には水虫ではないのに水虫と診断されて良くならない患者が多かったが、半数近くは重症となったアトピー性皮膚炎（AD）患者であった。このような重症AD患者に対し、世界

標準治療である炎症を抑えることができる強さのステロイド外用薬を皮疹部位だけに多少べとつくぐらい1日2回外用する（保湿剤は最後まで使用しない）と2〜3週間程度で良くなり、その後は無治療か、再燃した部位だけにステロイドを外用するだけですむ。そこで難治となった原因を探る目的で、今までに受けていた治療を、詳細に問診した。

その結果、内服療法にも問題があるが、一番の問題は外用療法であった。それは①炎症を押しやる事ができない弱いステロイドを外用、あるいは少量外用、②保湿剤を大量に使用、③ステロイド外用薬を保湿剤と混合（希釈）して外用、④保湿剤を全身に使用して（ステロイドの吸収を悪くする）、ステロイドを外用、⑤少し

良くなると保湿剤に変更、など世界の皮膚科教科書とは異なる治療が行われていた。なぜこのような治療が日本各地で行なわれているのか調べたところ、これらの治療はメーカーの利益と皮膚科の収益向上（すぐに良くなると、患者は来院しなくなる）のために行われたものであった。そこで医事新報社からの依頼で、2019年に「学会では教えてくれないアトピー性皮膚炎の正しい治療法」という本を出版した。しかしこの本は多くの皮膚科医からそっぽを向けられ、ある皮膚科教授からは「とんでもない本を出す」と非難された。しかし私の本を買った美容皮膚科の先生から、ある学会で私にお礼をし

たいと言って突然話かけられた。その先生が言うには、私の本の通りにAD患者を治療したら、患者から「こんなに良くなったのは初めてだ」と大変感謝されたという。しかしそのあとに「今までの治療は一体何だったのでしょうかね」と言われたそうである。つまり私の本は今まで不適切な治療をしてきた先生にとっては大変迷惑な本のようなのである。そのため私の教え子から皮膚科医向けの本ではなく、患者向けの本を書いた方がAD患者が救われるのではないかと言われた。そこで出版したのが、「間違いだらけのアトピー性皮膚炎診療―なぜ日本の患者は治らないのか、どうすれば治るのか―」（2022年、文光堂）という本である。

AD患者は先進国で増えているが、重症AD患者が一番多いのは日本である。実際コロナ禍の前にバンコクに行った時に、タイの皮膚科専門医から「なぜ日本ではAD患者をこんなにひどくするのか」と言われた（タイには大勢の日本人駐在員とその家族がいる）。医学的証拠に基づいた治療は、米国や欧州の皮膚科学会のガイドラインや教科書に記載されている。しかし日本ではメーカーの宣伝のための講演が学会や商業誌などで、広く宣伝され、ADを簡単に良くしないようにしている。具体的には日本では主な治療薬はステロイド外用剤ではなく、保湿剤を多用する「減ステロイド療法」である（かつて日本では「脱ステロイド療法」が提唱さ

「脱ステロイド療法」が提唱され死亡した患者もいた。医師という職業を選んだからには、メーカーからお金をもらうのではなく、患者を治すという医師として当たり前前の使命を今後も全うしたいと思っている。

若きOBたちの 應援団



平賀基、村松純貴、小林右京、坂本尚己、飯田祥太、岡本友、有賀颯汰、吉村颯馬……、彼らの名前に聞き覚えはないだろうか。甲府の同窓会、また東京同窓会で欠かせない存在となった應援団OBによる演舞。毎回のように登壇し、現役そのままの技を見せる彼ら。多くは平成20年代以降の卒業生であり、最年少の吉村君に至っては令和2年卒という若きOBたちはなぜ応援を続けるのか、甲府一高同窓会にとって應援団の存在とは。本年5月9日に開催された甲府同窓会の演舞直後、OBの中でももっとも若い三人に聞いた。



応援団の若きOBたち

—— まず応援団に入ったきっかけを教えてください。

岡本「担任の先生に推薦をいただき入団を決めました」

有賀「岡本が入ると言ったから(笑)」

吉村「新入生オリエンテーションの時、先輩方の姿に惹かれたためです」

—— 吉村君が惹かれたその先輩、になるわけだね、岡本君有賀君は。甲府の同窓会にほとんど毎回、そして東京同窓会にも出てくれている。実際準備も大変でしょう。

岡本「甲府の同窓会へは毎年欠かさず出させていただいています。去年の東京は都合がつきませんでした。が、なるべく出られるようにはしています」

有賀「準備については同窓会実行委員の方が主にやっていたと思います。自分たちは当日に足りないものなどのチェックなので、そこまで大変というわけではありません」

吉村「今日もテーピングが足りないことを先輩に指摘されて急遽買いに行きましたし」

—— 確かに団の人間じゃないと気づかない所もあるよね。で、みんな現役の時と同じくらいピシッと動いていると思うけど、普段から練習とかしているの？

三人「いやいやいや、特にそこまでは！」

有賀「いや岡本はしてるだろ」

吉村「身体が覚えている、ということはあると思います。自分は卒業して6年程度ですしまだ出来る

感覚はあります。あとは応援団の先輩方にご指導いただきました」

岡本「実際しんどい所はありますが、まだ動けます」

—— さりげなく陰で練習しつつ(笑)、でもそもそも毎回のように出ているのは率直に言って凄いのと思う。なぜだろう？

有賀「なぜ、なぜでしょう…、そこに応援団あるから、としか…」

—— そこに山があるから！

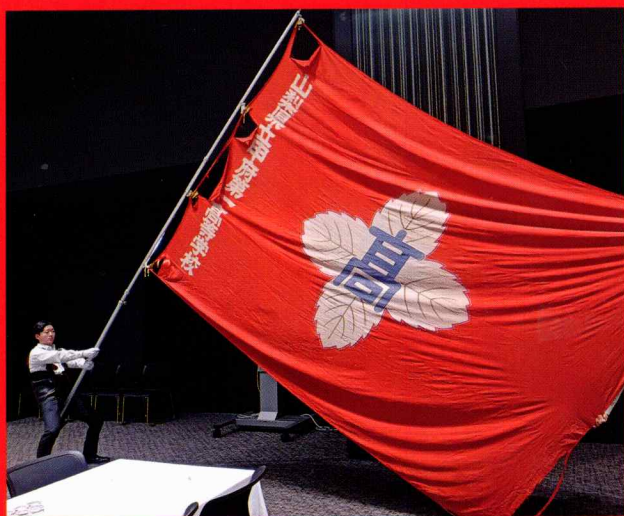
岡本「ある、というのは大事なことだと思っています。やはり同窓会で応援を楽しみにしてくれている先輩方がいらつしやいますから、そういう方がいらつしやる限り応援団が『ある』という形が続いていければと思っています」

有賀「出来る限りはやりたいですし、そして応援団の存在をもっと知ってもらって現役が繋いでいける環境になれば嬉しいです」

吉村「同窓会に参加して演舞を行う度に諸先輩方の心に応援団というものが根強く残っていることを感じます。これからも伝統として残したいと思っています」

—— 普通の部活だと3年生の秋で引退だけど、応援団の場合は卒業してもある意味活動が続く。そこが部とは違うところで、確かに一高と核の部分で繋がっている気がするよね。そのあたりはどう思いますか？

岡本「そうですね、一高生である限り一高を応援し続けることが応援団の勤めというか、宿命？み



應援團の若きOBたち

たいなものも感じています」

有賀「今日は甲府市長もお見えになっていましたし、またご高齢の先輩方もおしなべてみんなが『一高生』になる、それを我々の演舞で彩ることができるのは、改めて應援團は凄いなと思っていますね」

吉村「先輩方から継いできたことですから」

——そう、戻っちゃうんですよね皆さん現役に。そのスイッチを押すのはさすがに應援團だと思つ。最後にそんなみんなにとって「応援」とは？また「一高」とは？

吉村「やはり一高生ですし、應援團ですから、その自覚の大きさが一高なのかと」

有賀「同窓生の皆さん本当に、いまでも大きな声で校歌も応援歌も歌われてますし、やはり一高生なんだなと思います。壇上でも大きな声が聞こえてきて気合入りますね、これが一高だと思えます」

岡本「応援をして、それが一つになって返ってくる。本当に一高という感じです。なんだかんだ言っても同窓会での応援は楽しいんです。應援團は敵しい場所ですが、応援を通じて多くの卒業生の皆さんを鼓舞できるのは嬉しいことだと思います」

有賀「自分たちは同窓会の中でも年下の世代ですが、だからこそそこは充実しますよね、すごい先輩方を自分たちが応援するという所が」

吉村「時代合わないと言われることも多いですが、やはり伝統のひとつとして何かの形で一高で應援團が続いてほしいと思っています」

——ありがとうございます。これからも一高生として、應援団員としてよろしく願いします！



同窓会におけるOB 應援団のはじまりは18年前。甲府同窓会での演舞は現役団員が勤めていたが、現役が途絶えていた当時、昭和51年卒の羽田团长率いるOB 應援団が結成され、以来同窓会における伝統として今まで続けられてきた。ともすると

「いて当たり前」のように思われがちな同窓会の應援団だが、毎年続けていくのは並の努力ではないだろう。

たとえ卒業しても、應援団であるかぎり一高生を応援し続ける。同窓生が一高生としての自覚をあらたにするこの同窓会という場において、すべての一高生を応援する應援団OBの演舞は、應援団として卒業した以上一高を応援し続ける、という彼らの献身の上に成り立っているのだと思う。

むろんそれを表に出さないのが應援団たるところだが、しかし今後同窓会幹事を務める世代では活動が途切れていた時代もある。事実、令和2年卒の吉村君が目下「最後の团长」だ。同窓会はもちろん、現役世代においても應援団の歴史が今後刻まれるよう、筆者もOBとして強く願う。同窓生の皆さんもどうか、應援団がともにある一高と同窓会を、それこそ応援して頂けたら幸いです。

聞き手…杉浦昭太郎（S62年卒 現役時代應援団所属）





首都圏甲府会へ 行ってきました！

昨年令和7年11月26日、首都圏甲府会の総会が日比谷の日本記者クラブで行われました。

首都圏甲府会は、甲府出身者や甲府にゆかりのある甲府大好きな方々で構成され、山梨県人会連合会の中で甲府市はもとより、山梨県、さらに日本の発展のためにがんばる団体です。

一高OBである名誉顧問の樋口甲府市長（53年卒）をはじめ、理事の要職にある一高の先輩方も多い首都圏甲府会。日々東京で過ごしているとややもすると忘れがちな故郷の空気を感じるべく、62年卒の我々、総会にお邪魔してまいりました。

活躍する一高生に表彰が

まずは首都圏甲府会の活動と監査。会長のお話を拝聴します。続いて中村名誉会長の「生きがいを作る」新しい山梨への講和もお聞きし、その後、首都圏甲府会の授賞報告がありました。

この首都圏甲府賞は、甲府ゆかりの方々が甲府を盛り上げるため、また、次世代を担う子供たちの活躍の奨励を目的に創設されたそうです。贈賞自体は既に甲府で終わっており、東京からはビデオでの拝見です。

今回は市内の小学生から高校生まで、スポーツや芸術などで全国クラスの活躍をされた皆さんが並びました。とそんな中、我が一高の名前が！なんと2024年度ロボットアイデア甲子園全国大会最優秀賞の一高



第16回 首都圏甲府会 総会・交流会



生、鶴田朔弓さんが個人賞を受賞されたのでした。おめでとうございます。後輩の活躍は純粋にうれしい！
それにしても甲府市は全国県庁所在地中46位という小人口なのですが（2025年7月現在）、全国レベルで活躍する若い世代が大勢いることに誇りのようなものを感じます。大人も頑張らないと。

未来に向けた甲府の姿とは

さてその後は一高の先輩、樋口市長と「甲府市リニア街づくりデザインディレクター」深澤直人先生によるトークセッションです。リニア開通の時代を控え、甲府は、山梨は、そこに暮らす人々の暮らしは、どう変わるのか、変えていくのか、と実にホットな話題です。

まず街づくりのプレゼンを拝見。これには度肝を抜かれました。森林面積に比較し都市緑地が少ない甲府盆地を緑化し、暮らしの質を上げ、魅力を発信し、中長期的に様々な人材と資金が集まるビジョン。ヒトモノカネを集める話ならどの自治体もがんばっているだろうけど、その中心に「森林」を置く発想に痺れました。全国屈指の自然県、山梨らしい取り組みだと思えます。そうかーそう来たか。

むろん夢物語ではなく、森林都市の価値の高さは国際的に見ても確かだそうで、様々なリソースを巻き込む根拠としても示されていました。

森の開発は数世代にわたるもの。完成の晩に我々は生きていないかもしれませんが、豊かな甲府を次世代につなぐ現代的で意義深いビジョンだと思いました。これを市長とともにやるのだと、いやもう、ワクワクしますね！都市デザインの世界は本当にスケールが大きい、とほぼ口あんぐり状態です。緑豊かで「幸せな」甲府、早く見たいですね。

その「幸せ」についても、樋口市長より「こうふく」を手がかりにご説明頂きました。甲府の幸福、素敵なテーマです。少子高齢化や人口減など課題がありつつ、それでも国家百年の計です。広い視野と長い時間単位で街づくりを考える、市長も深澤先生もすごいなーと小物感全開で聞いておりました。

総会のあとは、首都圏甲府会の理事で一高の先輩にあたる山本さん（41年卒）、中村さん（60年卒）にご挨拶し、様々な方たちと言葉を交わしました。故郷の外側においても甲府の未来を思い、支える一高の諸先輩はじめ多くの方に触れ、いずれ自分も甲府になにか恩返しを、と東京の夜景の中で殊勝にも感じ入った会でありました。会場には甲府ゆかりの閑取、竜電関も来場され、大いに盛り上がりました。

今回お誘いいただいた山本先輩、中村先輩、そして本会に参加されている一高OBの皆様に感謝いたします。



日新鐘に寄せて

一紅会会長 山下 恵子

日頃は一紅会の活動に深いご理解とご協力を賜りまして、心より御礼申し上げます。

昨年7月の東京同窓会におきまして、第六代一紅会会長を拝命致しましてから早一年が過ぎようとしております。はじめは戸惑いもございましたが、歴代会長はじめ、多くの方々から温かいお言葉やご支援を賜り、先輩の皆様が築いてこられた一紅会を、より一層素晴らしい会にと、改めて心に重く受け止めております。

今年も一紅会最大の行事であります「第27回一紅会主催春の講演会」を、去る3月14日（土）に、アルカディア市ヶ谷にて開催いたしました。前日まで寒い日が続いておりましたが、当日はお天気にも恵まれて、270余名の参加者をお迎えし、昭和43年卒仏教学者の末木文美士様に、「神と仏と日本人―宗教から読む歴史の深層―」と題

しまして、少々難いお話かと思われましたが、日本の旧来からの神様と仏様の繋がりを、また、近代における神仏の役目などを、解り易くお話いただきました。皆様熱心に聴かれていच्छやいました。

講演会終了後の懇親会では、短い時間ではございましたが、同級生そして、学年の域を超えて、とても和やかに過ごされている皆様のお姿を拝見して、甲府一高の深い絆を、また同窓の繋がりを強く感じる事が出来ました。長い歴史が作り上げた賜ものと感銘を受けました。

一紅会は、平成8年（1996年）に甲府一高女性ネットワークの会として発足いたしました。現在は、昭和30年卒から平成28年卒まで、39学年86名の学年幹事で構成されていて、年3回の幹事会と春の講演会に向けて活動いたしております。年々若い

学年の同窓生も減少しておりますが、一紅会も御多分に漏れず、平成卒の幹事が少ない状況です。

現在は、女性も仕事をもち、日々忙しい中での活動は大変ですが、その経験を活かして、一紅会に新しい知識を取り入れています。また、女性の持っているパワーを存分に発揮し、力をあわせて邁進しています。講演会開催により、皆様に喜んでいただけることが、何よりと思っております。

本年度の講演会、懇親会は、無事に滞りなく盛況のうちに終えることが出来ました。これもひとえに、同窓の皆様のお力添えの賜ものと深く感謝いたしております。

今後とも変わりますが、一紅会へのご理解とご協力を宜しくお願い申し上げます。

一紅会春の講演会レポート



令和8年3月14日、第27回一紅会主催春の講演会と懇親会がアルカディア市ヶ谷で開催されました。講師として登壇されたのは、仏教学者の末木文美士先生です。末木先生は一高を昭和43年にご卒業。東京大学文学部卒、同大学の助教授、教授を経て現在東京大学の名誉教授をつとめておられます。

昨日までの寒さが嘘のように晴れ渡った穏やかな市ヶ谷のお堀端。桜の季節にはまだ早いです、春の訪れを感じながら末木先生の講演をお聞きしました。

テーマは「神と仏と日本人―宗教から読む歴史の深層―」。普段何気なくお参りしている神社やお寺が、日本人のところに、日本の歴史に、どのように影響してきたのかというお話です。

私たちの生活の中に、当たり前のように存在している神道と仏教。子供が生まれた時は神社に詣で、お葬式はお寺へ。さらにクリスマスまで楽しみながら、しかしその都度拝む神が異なることに私たちは違和感を覚えません。インドから中国、そして日本には6世紀に伝来した仏教と、もともと日本で信仰されていた神道は、習合しながら私たちの何気ない日常に入り込んでいます。そんな、知っているようでいて改めて言われるとかなり不思議でもある日本人の宗教観について、とても楽しく、そして興味深く教えていただきました。

中でも驚きだったのは廃仏毀釈の現代の一般解釈が歴史とは異なっている点、そして神道における八百万の神といった万物に靈性を認める姿勢が実は

仏教が入ってきてから形作られた、というお話でした。

私たちは山や大木を神としてしばしば崇めますが、そもそも山や大木は依り代であり神そのものではない。神をおろしてくる存在だったというのです。古いシャーマニズムが仏教の影響によって宗教的な形式を整えていったのがいまに続く神道なんですね。これはちょっと人に喋りたくなるお話です。勉強になりました。

末木先生のやさしい語り口からぐいぐいとその世界に引き込まれて、あっという間に時間が過ぎました。当日は一高卒業生以外の方も講演を聞きに来たりと、大人気の末木先生、貴重なお話をいただき、改めてありがとうございます。

続く懇親会は山下恵子新会長のお言葉からはじまりました。そして乾杯は清水昭東京同窓会会長の力強いご発声。さっそくフライングするテーブルもありつつ、参加の皆さんはそこかしこで旧交を温めていました。

会のおわりには、今年5月9日に甲府の記念日ホテルで開催される同窓会、そして7月11日に京王プラザホテルで開催される東京同窓会、それぞれの幹事長が壇上で挨拶。また今年も旧交の楽しみが増えました。同窓会、東京同窓会の幹事の皆様よろしくお願いたします。そしてこの一年、一紅会春の講演会の準備を丁寧に進めてくださった幹事の皆様、ほんとうにお疲れ様でした！

こんなにも同窓の集いが各所であり、また末木先生のような素晴らしい先輩方を多数輩出しているのが母校、甲府一高はあらためて凄い高校だなあと感じ入りつつ、早春の市ヶ谷を後にしたのでした。



素敵な料理の並ぶ懇親会

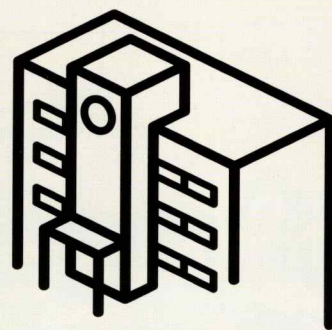
清水東京同窓会会長によるご発声

山下会長による挨拶

会場は満席

講演される末木先生

4月 5月 6月 7月



一高の一年

入学式

4月9日(水)令和7年度の入学式が行われ、
201名の新入生が入学を許可されました。

4月



応援練習

4月14日(月)、新入生を対象とした応援練習を行いました。本年度より練習内容や声掛けなどを工夫し、持続可能な形での応援練習を実施。はじめは緊張していた新入生もしっかりと校歌を歌うことができるようになり、充実した時間となりました。



高校総体

5/7(水)～5/9(金)、第77回県高校総体春季大会が開かれ、陸上部はじめ運動部の生徒が日ごろの練習の成果を発揮しました。

5月



一年生の入学から三年生の卒業まで、文武にわたって積極的に活動している後輩たちの姿をご覧ください！



一高の一年

一高祭 体育祭

6月

6月17日(火)～19日(木) 第78回一高祭が行われました。1日目はYCC県民文化ホールにて文化局発表とクラス発表、2日目は校内でクラス企画、文化局発表などが行われました。PTAのバザーやキッチンカーもあり大盛況でした。



探究科基調講演

6月20日のSDGs基調講演では丸茂哲雄さんからSDGsを自分事として考えることの大切さなどについて教えていただきました。クイズ形式で楽しく学ぶことができました。



7月

夏の甲子園県予選

7月12日(土)、夏の県予選は一回戦で日川高校と対戦。結果は惜しくも5-4でしたが、延長11回までもつれた熱戦を戦い抜きました。



全国総文祭 2025

7月30日(水)、かがわ総文祭2025に放送部門、日本音楽部門で参加。とても貴重な経験を得ることが出来ました。



8月

インターハイ

7月28日(月)～8月3日(日)、鳥取県米子市で行われたインターハイの女子団体の部に弓道部が出場しました。6泊7日という長い期間を仲間と一緒に戦い抜いたことは、一生心に残る思い出となったことと思います。



應援団吹奏楽定期演奏会

8月5日(火)、YCC県民文化ホールにて第66回定期演奏会を行いました。今年も大ホールの2階席まで客席がいっぱいになるほど多くの皆様に見守られ盛大に開催することができました。

10月

強行遠足

10月4日(土)～5日(日)、第97回強行遠足が行われました。保護者の方、同窓会の方、沿道で声援を送ってくださった全ての皆さま、給水所・検印所等で施設を貸してくださった方々、本当にお世話になりました。



12月

研修旅行

探究科は12月8日より台湾へ、普通科は12月9日より沖縄へ、教室では学べない多くの経験をへて、勉強や部活動にこれからも全力で取り組みます！





一高の一年

1月

ブランドサミット

1月24日(土)に山梨ブランドサミットが開催され、探究科だけでなく、2年生の普通科も総合的な探究の成果をポスターセッションにて発表しました。活発な意見交換が行われ、探究活動のさらなる活性化につながる機会となりました。



共通テスト激励会

1月16日(金)4校時、共通テスト激励会が視聴覚室で行われ、校長先生をはじめ先生方から激励の言葉をいただきました。3年生の健闘を祈っています。

3月

同窓会入会式・表彰式

2月27日(金)、同窓会入会式・表彰式・卒業式予行が行われました。同窓会入会式では、同窓会より新入会員の生徒へ記念品が贈呈されました。



卒業証書授与式

第78回卒業証書授与式が行われ、普通科157名、探究科56名に卒業証書が授与されました。3年生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。



学び、自分で考え、行動する

3年1組
有賀 禎剛全日本空輸株式会社
フライトオペレーション
センター B787部
機長

「(大人の都合で) 大学推薦は別の者にした」。
担任に告げられた余りにも理不尽な理由に怒りが込み
上げ、同時に世の中の不条理を知った。
今も忘れない悔しい出来事だったが、それ以外は楽し
い事しか覚えていない。

文化祭の豆腐投げ、前店横店での飲食、夏休みの海水
浴、タヤけニヤンニヤンの観覧等々。

特に悩みも無く友人にも恵まれて平凡ながらも満足し
た高校時代であったのではないだろうか。

結局浪人することになり、寝る間を惜しんで勉強に
明け暮れた。二浪の選択肢は無かったので必死だった。
人生で一番努力をした1年であった。この時期に掴ん
だ勉強のやり方は今も実践している私の大きな財産と
なった。

父の影響かガンダム世代だったからか、人型ロボット
を開発したく早稲田大学理工学部の機械工学に入学し
た。時代はバブル。大学は遊園地と呼ばれていた頃で
ある。入学時の薄い目的は何処へやら、テニスにス
キー、競馬、麻雀、呑みと大学生活を満喫した挙句、
当時人気であった金融機関への就職を考えていた。
そんな折、入社後にパイロットを養成する採用がある
事を知った。4次試験の身体検査で再々検査になった
時は諦めかけたが内定を貰うことが出来た。

訓練は日本とアメリカで行なった。国家試験の座学

等は日本で、飛行訓練はカリフォルニア、熊本そして
沖縄とステージ毎に場所が変わった。副操縦士として
旅客便に乗務したのは入社から5年後の秋であった。
一年目の吹雪の庄内空港。訓練中の安定した気象条件
と異なり、気流は乱れ機体が大きく揺れる非常に敵し
い状況の中、安定した進入から着陸する左席の機長を
見て、これがプロの仕事か！と衝撃を受けた。質実剛
健の四文字が仕事と重なったのはこの時であった。
総ての仕事がそうであるように、資格だけでは物にな
らない。飛行機の操縦も時間をかけ経験を積んでこそ
安全で快適なオペレーションが可能となる。

運航中、悪天候や乗客のトラブル、装備品の不具合等
が複合的に重なる事がある。このすべての事象を訓練
で経験してから機長になる事は不可能である。クリ
ティカルに成り得る代表的な事態は徹底的に訓練して
いるが、それ以外は先輩との会話やハンガートークで
得る事になる。ハンガートークとは経験した失敗等を
ざっくばらんに話す事により、他の者は実際に遭遇し
なくても経験値を得られる先人の知恵である。

現在、機長としての飛行時間は一万五千時間を超え、
搭乗いただいたお客様は約50万人となった。ベテラン
と言われて久しいが、新たな発見もまだあり、ゴール
など無い仕事である。

「今君たちが勉強している理由はマスコミに騙され
ない為だ」と、高校の担任に言われた先輩がいた。や
や過激な言い回しではあるが大いに賛同できる。例え
ば航空機事故が起きた場合の専門家の解説を我々は鵜
呑みにする事は無い。十分な航空知識を持っているか
ら自分で考える。知識があれば、参考にすれども他者
の言動に流されることなく自信を持って行動ができる
はずである。全ての事柄に精通するのは不可能だが、
少なくとも自分に影響を及ぼす事には知識を蓄積し続
ける必要があり、その一助となるものが学校で学ぶ基

礎知識と自分で考える習慣ではないだろうか。前述の
先生が言った「マスコミ」とは専門家を含めた他人で
あろう。即ちマスコミだから間違えう訳がないと思考停
止せずに自分で正誤の判断をすべきで、それには知識
で武装する事が大切であると考ええる。

海外に行く機会が多いがそこで感じるのは、日本と
異なり自分を出し行動するのが当たり前の文化だ。私
は日本人の方が色々な面で優れていると思うが、日本
の常識が必ずしも自己を経済的にも精神的にも豊かに
してくれる訳では無いと思う。外国の良い部分も積
極的に取り入れなければ、国力は弱まる一方で一部の
力のある者だけが得をするこの構造は変わらないので
はないだろうか。



一步一步のその先に……
逃げない勇気



3年4組
辻 由樹
(旧姓 名取)

甲州市立
井尻小学校 校長

四十年の歳月を越えて

母校、甲府第一高等学校の学び舎を巣立ち、小路の門を背にしてから、早いもので四十年の歳月が流れました。

私は現在、小学校で管理職として勤務しています。数年前までは、中学校で教壇に立っていました。思春期の真つ只中にあり、自己のアイデンティティを形成しようともがく中学生たちと向き合う日々の中で、私は折に触れて母校の「偉大さ」を痛感せずにはいられません。それは単なる進学実績や歴史の長さといった数字に表れるものではなく、一高という場が私たちに植え付けてくれた「生きる姿勢」そのものにあると感じるからです。

強行遠足……立哨の数年間で出会った「鏡」

卒業後、一人の同窓生として、また一人の教育者として、私は数年間、強行遠足の立哨ボランティアを微力ながら務めさせていただきました。現役時代はただ必死に、迫りくる時間と戦いながら前だけを見て駆け抜けた道でしたが、今、沿道で静かに後輩たちを待つ立場になり、見えてきた景色があります。

寒風が吹き抜ける中、遠くから少しずつ近づいてくる、規則正しいようであるどこか危うい足音。ヘッドランプの光が闇を切り裂き、そこに浮かび上がるのは、



足を引きずり、苦悶に顔を歪めながらも、一步、また一步と前へ進む後輩たちの姿でした。その「苦しくて逃げない」瞳を見た瞬間、私の胸には熱いものが込み上げました。男女で距離や走る時間帯に違いはありますが、そこにいたのは、四十年前の私自身だったからです。立哨地点を通り過ぎる彼らに、私は「頑張れ」と声をかけます。しかしその言葉は、彼らへの励ましであると同時に、自分自身への再確認でもありました。一高生は、この過酷な道中で何を学んでいるのか。数年にわたる立哨の経験は、私にその答えを明確に示してくれました。

「逃げる」自分との対峙

強行遠足の本質は、他人と速さを競うことでも、単に距離を完走することでもありません。それは、自分の中に必ず現れる「逃げ出したい」という自分自身と向き合い、折り合いをつけるかという、極めて孤独で崇高な精神の闘いです。

私自身の現役時代を振り返れば、足の痛みは増し、心の中では何度も甘い誘惑の声が響きました。「もう十分頑張ったじゃないか」「ここで足を止めても、誰も君を責めはしない」と。しかし、その誘惑に負けず、重い足を一歩前へ踏み出すとき、私たちは「自分を信じる」という本当の意味を知るのでした。

誰にも代わってもらうことができない道。ショートカットも、魔法のような解決策もない道。ただ自分の足で、地面を踏みしめていくしかない。その絶望に近い状況下で、歩みを止めない勇気を持つこと。それこそが一高が守り続けてきた「質実剛健」の正体であり、私たちが社会へ出る前に授けられた最強の武器であったのだと、今になって強く実感しています。

教育の現場で語り継ぐもの

中学校という場所は、子どもたちが初めて「人生の壁」に直面する場所でもあります。勉強、部活動、人間関係……。思い通りにいかない現実と直面し、立ち止まり、挫けそうになっている生徒たちを前にしたとき、私はあの一高の精神を語ります。

「本当に辛くて、すべてを投げ出して逃げたいと思ったときこそ、自分を信じてごらん。派手な跳躍なんてしなくていい。ただ、次の一步を、歩みを止めずに踏み出してごらん。その一步一步の積み重ねの先に、今のあなたには想像もつかないような、新しく、そして輝かしい未来が必ず拓けてくるから」

これは、私自身が一高から授かり、そして強行遠足の立哨を通じて後輩たちの背中から教わった、人生における真理です。一高生が伝統の襷を繋ぐように、私は教え子たちに、この「逃げずに進んでいく勇気」を繋いでいきたいと考えています。

結びに……一高生としての矜持

卒業して四十年。私たちは人生の折り返し地点を過ぎましたが、一高で得た「学び続ける姿勢」と「折れない心」がある限り、私たちはいつまでも現役の「一高生」であり続けることができます。

母校が誇るべきは、その輝かしい歴史だけではなく、一歩一歩前へ進む卒業生を、時代の越えて輩出し続けていることこそが、一高の真の偉大さであると確信しています。

最後になりましたが、母校の益々の発展と、現役生の健闘、そして同窓の皆様のご多幸を心より祈念いたしまして、私の寄稿とさせていただきます。



「私と一高」

ギフト



3年5組
佐藤満里子
(旧姓 長田)

フィットネスインストラクター
健康運動実践指導者

今回の原稿を依頼され、私は「掘って、掘って、また掘って」してみました。

とは言ってもさつまいを掘るわけではない。なんせ高校生時代といえは今から約40年前、かなり深く掘らなければ記憶が蘇ってこないのです。

私の中にA-の装置があれば、40年前の記憶もスポポポーンと出て来そうなのに…

私は小学校の頃見たアニメの影響で、小さい頃から「声」の仕事につくのが夢でした。

中学時代は演劇部、高校時代は放送部、ただし途中から生徒会活動。

そして大学では落語研究部。

なるべく声を出す機会を設け、目指すは人気アナウンサー！

そして夢になって某地方テレビ局に入社！

そこで頑張りました！

一般事務職を(とほほ…)

まあ、世の中そんなにうまくは進まない。

でも私たちが就職した頃といえは、いわゆるバブルの末期。それなりに県



内でも楽しいOL時代を過ごすことができました。そういえば山梨県といえは老舗のO百貨店で行われたボジョレーヌーボーのお披露目には生牡蠣のタワーがそびえ立っていたっけ！

また、上司も参加する懇親会では余興でしっかり歌わせてもらいました。

「起て、撃て、勝て！」。もちろん応援団の振り付きで。これが案外喜ばれるのです。一高のネームバリューまだまだ健在でした。

そして今…

何がどうなつてそうだったのか、エアロビクスやヨガのフィットネスインストラクターとして結構「声」出しています。

ところで今A-の台頭が目覚ましいが、A-に取り込まれやすい職業としては、主に定型業務やデータ処理が中心の仕事。逆にA-の時代でも残りそうな職業は創造性、複雑な判断や感情労働とのこと。

ではフィットネスインストラクターは？と調べてみたところ、A-に取り込まれにくい部類に入るそうです(よっしゃー！)

インストラクターは人とのコミュニケーションの上で成り立ち、レッスン全体の雰囲気を作り出し、参加者が楽しめるように導く役割も担うため、生の人間によるエネルギーや熱意は、参加者の満足度に大きく影響することがその理由。

「先生、私膝が痛いのでこのポーズできません」

「大丈夫、では膝曲げずにやってみましょう。マイペースでオッケー」

私はとても優しいインストラクターということで通っている(?)

またエアロビクスの形(これをコリオという)を作る時には、楽しく動くことができて汗がかける、でもすぐには習得できない。

そんなヒリヒリしたやり取りを生徒さんたちと繰り返す醍醐味はなんとも言えません。

これは生身の人と人との間でないと成り立たないのです。

そんな偉そうなことを言っている私ですが、

ヨガのポーズの組み立てをする時には、

A-君に「腰痛に効くヨガポーズは何？」などつい尋ねてしまっている。

けっこう、A-君のお世話になっていることは否めません。

またこの子がなかなか賢い。私の希望するものの先の先を読んでアドバイスをしてくれます。

さて、この仕事。私にとっては、まさに天からもらったギフト。

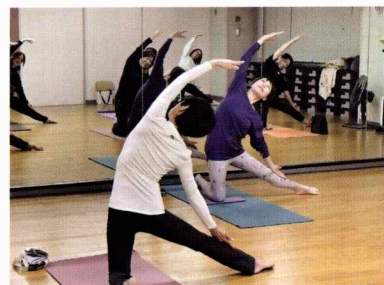
と言っても、私が特別な能力を持っているということではなく、日常茶飯事に起こるいろいろな悩みや苦しみから一瞬のうちに解放してくれるのです。レッスンに集中することで、嫌なこと全部をその瞬間は忘れさせてくれる。

こんなやりがいのある仕事につける人間はほんの一握り。感謝。感謝。

今、進路で悩んでいる学生も巡り巡って「天から授かったギフト」に就けるかもしれないのです。案外人生捨てたもんじゃないですよ。

さて、進路といえは私はどうやら本番に弱いらしく、一度大学の1次試験でつまずき、第一志望の大学は逃し、いわゆる滑り止めの大学に進む予定でした。

しかしここでも神様のいたずら。第一志望の大学が新



昭和62年卒、私たちの「あの時」と「今」をつなぐもの。



3年5組
志村 光司

山梨県立
甲府城西高等学校 校長

『感謝』

学科を創設するということで、時期を遅くして試験が行われ、幸いにもその新学科の第1期生となることができました。

「もうこれ以上受験勉強はこりごりなので、第二志望の学校に進みます」と開き直った私を説得してくれた今はなき保坂憲治先生には、本当に感謝してもしきれません。

そういえば、その保坂先生、めったに笑ったことがなかったたので、新学科合格の報告をした時の笑顔は本当にレア中のレア。消して忘れることはありません。

あの時はちゃんとお礼が言えませんでした。本当にありがとうございました。

とても優秀なAーですが、このように今でも思い出すと胸にジンジン来るやり取りはできそうにもありません。

これからさらに10年、20年先、Aーの力を借りる世の中になると思いますが、どうか生身の人間同士のふれあいを忘れずに生きていきたい。

心からそう思いながら、筆を収めます。

私は毎朝自転車です。20分かけ、甲府一高へ通っています。相川沿いを北上し、一高前交差点で山の手通り

を渡り左折すると、少し先に歴史を感じる校章を付した一段高い本館中央部が目に入りました。この景色は一高生なら多くの人が、真つ先に思い浮かべる一高の景色の一つではないかと思えます。卒業して40年近くたった今でも、山の手通りを車で通ると、ついつい目をやってしまいます。そして、今も変わらない校舎が正門の奥にどっしりと佇んでいることに、なぜかほっとした気持ちになります。

甲府一高で過ごした高校生活を思い浮かべると、様々なことが今でも思い出されます。3年目によく小諸にたどり着くことができた強行遠足、教室に仲間と寝泊まりしたバスケットボール部の夏合宿、高校生活の日々の楽しみであった学食のチキンライスや日替わり丼、いつとはいわず足しけく通った学校近くの喫茶店など、数えきれません。今となってはすべてがかけがえのない大切な思い出となっています。

一高を卒業後、私は京都の大学に進学をしました。京都の大学を選んだ理由は、高校時代から歴史、特に日本史が好きだったこともありです。大学では最終的に西洋史を専攻し、近現代ドイツ史のゼミに入りましたが、偶然にもゼミの教授であったのは一高の大先輩である望田幸男先生でした。望田先生はドイツ史を政治史だけでなく社会史の視点から捉え、軍国主義や教育制度、エリート養成の仕組みを精密に分析し、日本とドイツの比較近代史という方法論を通じ、両国の近代化の違いを明らかにした近現代ドイツ史の大家でもありました。

望田先生には、恥ずかしながら不真面目な学生であった私を何かと気にかけてくれ、卒業の際には手紙をいただきました。その手紙は、今でも自宅に飾ってあり、特に教員になって間もない頃には、私の心の支えの一つでありました。一部を紹介させていただきます。

〔前略〕・・・いつまでもなく今日、高校教育に携わ

ることは大変な苦勞をとまなう状況にあります。自分の青春時代をよく想起しながら、高校生たちを明るくのびのびと、勉学にクラブに教導してください。すべてのことの前提は、君自身が一個の人間として自立して人生に立ち向かう気概を持つことだと思えます。小生が若い頃、よく読み返したロマン・ロランの『ジャン・クリストフ』の中の一説を、君に対する小生の最後の「説教」として君の人生の新たな門出にあたり贈ります。」このあと、小説の一節が続きます。

そして、大学を卒業後、私は山梨に戻り、高校の世界史の教員となりましたが、偶然にも一高時代の担任の先生をはじめ、多くの恩師の先生方と赴任する先々で一緒となり、今度は教師としての在り方など教えていただいたこと、同僚として働くことができたことは幸せなことであり、不思議な一高の縁を感じることでもありました。そして、第139周年甲府中学・甲府一高同窓会に当番幹事として参加させていただいたことは、高校卒業と同時に一度は切れてしまった同級生とのつながりを、再び結びなおすことができる嬉しい機会となりました。

一高を卒業して40年近くたった今、私自身が、母校に思うことは、一高生であったことで多くの人と出会うことができたことに対しての感謝の気持ちです。伝統がもたらした出会い、偶然の出会い、山梨で教職に就いたからその出会いなど様々ではありますが、甲府一高を共通のよりどころとした素晴らしい出会いをたくさん経験することができたことは、私自身の人生をより豊かに、そして幸せなものにしてくれています。

私は、現在、甲府城西高校に勤務して2年目になります。本校は機山工業高校と甲府第一商業高校が統合してできた県内最初の総合学科高校であり、今年度（令和8年度）、創立30周年を迎えます。このようななか、今の高校教育現場はというと、本当に多くの教育課題

「私と一高」

が山積し、舵取りが難しい状況にあります。何をすべきか、どう対応したらいいかなど、常に模索しながら日々を過ごしていますが、生徒や学校のために、これからも精一杯、悩みながらも尽力をしていきたいと思っています。



甲子園と東大



3年7組
小沢 行広

甲府湯村・石和温泉
常磐ホテル 営業部長

年齢のせいかな、私はよく夢を見る。

『その1 落第する夢』

大学卒業間際、一般教養科目の単位が足りないことに気付く夢。

その結果「卒業不可」となり、夢の中ではなぜか毎回、一年生からやり直している。

『その2 強行遠足の夢』

そろそろ40年前となる、昔の話。夢であり、回想でもある。

二年目まではわりと楽勝で小諸まで行けたので、油断と慢心があったのだと思う。

無念の途中棄権。

その時点で、18歳の私は「これ以上進むと死ぬ」と浅はかな判断をし、リタイアするに至った。

ただ、その決断はどうだったのか。

今振り返ると、決して間違いはなかったのだろうが、本当に自らの限界に挑戦

したのか、疑問しか残らない。

オリンピック選手やメジャーリーガーならともかく、ごく普通のサラリーマン生活を送るのならば、肉体的・精神的に、本当に文字通りの「自らの限界」というものに挑戦する機会は減多に、あるいは全くないのではないのか？

口で言うのは簡単だが、実際に行動するとなると話は別。イチローや大谷選手にはなれない平凡な高校生にも、その機会を与えてくれる「強行遠足」という一大ビッグイベントは、我ら一高生にとって、まさに天から与えられた、しかも三回も巡ってくる最大のチャンスだ。

こんな幸運は、またとない。

おセンチな話ではなく、多少の無理をしてでも、もう一歩前進し、次なる「未知の景色」を見ておけば良かったと、58歳の私は心から思う。

ただから言える。

自問自答するのではなく、もはや後悔でしかない。

『その3 母校が甲子園に出る夢』

夢の中で、我が母校が甲子園に出場している。

私は野球部出身ではないが、どさくさ紛れにスタンドにいる。声を囁らし、熱い声援を送る。応援団&ブラ

パンのOB・OGも多数駆り出されている。応援歌は「いま風」な曲ではなく、コンバットマーチやポパイ。

一高が最後に甲子園に出場したのは、私達が生まれた昭和43年とのこと。

首都圏の、とある旧制中学から続く伝統校の中には、東大合格者が全国の公立高校中でトップを争い、複数回の全国制覇を経験した運動部を持ち、ラグビー部も近年花園に出場、などなどの華々しい実績を誇る学校があると聞く。文化系の部活動でも全国を窺い、あの「高校生クイズ」でも強豪らしい。



高も、かくありたい。

みんなで行こうよ、甲子園。

花園でも国立競技場でも、代々木体育館でも国技館でもいいんです。

あの応援練習が無駄ではなかったことが、やっと証明できる日。

寄付金、もちろん出しますよ。少ないけど。

一人で同時に「甲子園と東大」を達成しなくても良い。同級生というコミュニティの中に、志を異にする仲間が共存する強み。

私達ホモ・サピエンスは、高いコミュニケーション能力で北京原人をはるかに凌駕し、ネアンデルタール人との競争の中でその長所を取り込み、最終的にDNAレベルでは共存した。

多様な仲間がいるからこそ強くなり、勝ち残る。突出した個性は尊重しつつ、皆でスクラムを組み、前進する。我ら総合選抜世代の結論です。

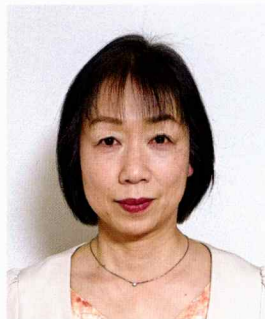
私はいわゆる「成功者」ではなく、「模範的なOB」でもない。

でも、そのスピリッツとソウルだけは、いつまでも持つ

ち続けたいと思う。

東京同窓会の開催、誠におめでとございます。

三十年後、母校で泣いた理由



3年8組
山本なお美

シミケア・肌質改善&
リンパケア【THALIA】
オーナー

高校を卒業して三十年以上が経ったある日、母校からお声がけをいただき「先輩に学ぶ」というテーマで一年生の授業を担当させていただく機会がありました。久しぶりに母校の校舎に足を踏み入れ、制服姿の生徒たちを前にして話をするようになりましたが、まさかその後こんなにも心が揺さぶられる出来事になるとは思っていませんでした。

私は家庭の事情で高校卒業後、進学することができませんでした。周りの友人たちが大学へ進学する中で私は就職という道を選びました。当時は少し寂しさを感じることがありましたがそれが特別不幸なこととは思っていませんでした。父も母も毎日一生懸命働いており、その姿を見て育った私は「自分の力で生きていく」ということに疑問を感じたことがなかったからです。車も、成人式の着物も、自分のお給料で買いました。決して裕福ではありませんでしたが両親は私をとてもとても大切に育ててくれました。振り返ってみると私にとってそれは何よりも大きな財産だったと思

います。

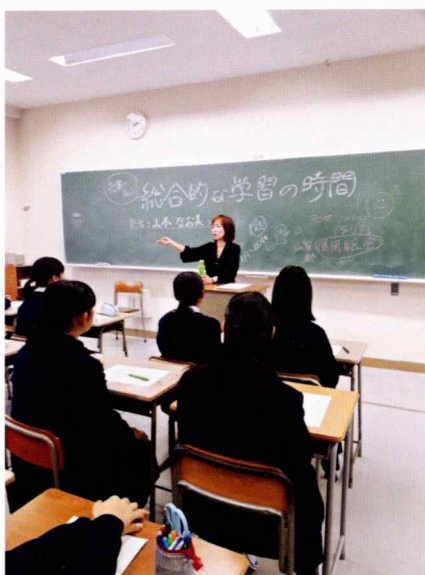
そんな中、三十九歳のとき、家業が軌道に乗った父が初めて私に車を買ってくれました。長年働き続けてきた父にとって、それはきつと嬉しい出来事だったのだと思います。しかし正直に言うと、そのときの私はあまり嬉しいと感じませんでした。それまでの人生で自分の欲しいものは自分で働いて手に入れてきました。苦労して得たものほど価値があり、喜びも大きいということを経験していたからです。ですが同時にそのとき初めて気づいたこともありました。両親は私に「自分の力で生きていく」という貴重な経験を与えてくれたのだということです。

高校卒業後に就職した会社には二十七年間勤めました。そして現在は起業しエステやリンパケアを行うサロンを経営しています。今はとても満たされた気持ちで充実した幸せな毎日を過ごしています。今回の授業では自分のこれまでの人生を振り返りながら、生徒の皆さんにいくつかのことをお話ししました。人生は慌てる必要はないこと。先のことは誰にも分からないから、そのとき自分が最善だと思う選択をしていくしかないということ。そして、何かのプロになる、本物になる、ということは続けることでしか手に入らないということ。さらに両親が一生懸命育ててくれたことへの感謝の気持ちについてもお話ししました。

授業の後、生徒の皆さんから感想文が届きました。そこには「大学に行けることは当たり前ではなく、恵まれた環境に感謝しなければいけないと気づいた」「将来が不安だったけれど少し安心した」「知識だけでなく様々な経験をするのが大切だと思った」「世の中には理不尽なこともあるけれど、自分の置かれた場所ですべて一生懸命努力したい」など、まっすぐな言葉がたく

さん綴られていました。また「ずっと幸せな人も、ずっと不幸な人もいない」という言葉が心に残ったという感想もありました。その言葉を思い出せば前向きになれるそうだと書いてくれた生徒もいました。それらの感想を読みながら、私はなぜか涙が止まりませんでした。高校生たちもまた、それぞれに不安や悩みを抱えながら毎日を生きているのだと気づいたからです。そして自分のこれまでの経験がほんの少しでも誰かの背中を押すことができたのかもしれないと思うと、胸がいっぱいになりました。

実は車を買ってくれたその翌年、父は亡くなりました。最後に娘に良いところを見せることができて嬉しかったのではないかと思います。ちなみにその車をもったときに「あまり嬉しくなかった」という気持ちは今でも父には秘密です。きつと天国で笑っていることでしょう。長い年月を経て母校に戻り後輩たちと出会えたこと、そして自分の人生を振り返る機会をいただけたことに心から感謝しています。



日新鐘2026

協賛会社協賛者（敬称略）

本年も多数のご協賛をいただき、
誠にありがとうございました。

- ・安達 実名美（昭和58年卒）
- ・池田 秀雄（昭和43年卒）
- ・一瀬 謙輔（昭和35年卒）
- ・上松 裕之（平成3年卒）
- ・宇野 文子（昭和42年卒）
- ・円明寺 住職 小林 康洋（平成1年卒）
- ・大金 桂子（昭和62年卒）
- ・大久保 雅司（昭和62年卒）
- ・岡島 加代子（昭和62年卒）
- ・小田切 仁（昭和56年卒）
- ・勝村 良一（昭和53年卒）
- ・小泉 敦夫（昭和29年卒）
- ・佐野 直樹（昭和54年卒）
- ・島田 敏男（昭和52年卒）
- ・谷口 百合子（昭和36年卒）

料理の宿

伊豆の花
IZU no HANA

伊豆の花は、竹林に囲まれた大人の
隠れ宿。旬の味覚、伊東漁港直送の
朝獲れ地魚、伊豆産の柑橘類や地元
の新鮮野菜を使い、匠の技が織り成
す四季の会席料理。客室露天風呂
から望む景色の先には伊豆大島。
ぜひ、日常から離れ、最高の癒しと
贅沢なくつろぎのひとときをお過
ごしください。

- 客室数七室（全室露天風呂付）
- 貸切露天風呂有
- 個室お食事処



 **ホテル 東京**
HOTEL TOKYO

【株式会社 ホテル東京】

〒108-0014 東京都港区芝5-27-1 三田SSビル5階
TEL 03-5445-1212

【伊豆の花】

〒413-0231 静岡県伊東市富戸 1169-20
TEL 0557-51-4187

<公式HP>



・大丸商事(株) 大久保 広行
(昭和50年卒)

・201ゴルフ

・HELLO(86) PROJECT
(昭和61年卒)

・121回 甲府西高同窓会実行委員長

・古屋 高一
(昭和62年卒)

・VECTOR(株) 小山 久枝
(昭和48年卒)

・本多 明美
(昭和60年卒)

・みかみ歯科医院 三神 厚
(昭和48年卒)

・南牧スキークラブ首都圏チーム
(同窓生5名在籍) 代表 大澤 敬造

・矢野 秀樹
(昭和52年卒)

・山本 秀彦
(昭和41年卒)

・(株)ワイ・ジュエリー 依田 和彦
(昭和60年卒)

日新2026

広告目次(敬称略)

本年も多数の広告掲載
誠にありがとうございました。

あ アイエス企画(株) 60

・IJPWERS(株) 59

・(有)アウテリアあかざわ 58

・青山整形外科クリニック 45

・アカオライフプロジェクト(株) 55

・一級建築士事務所 アクシス・

アーキテクト 55

・(株)アセツツ アール 61

アンド デイ 59

・いざかや 甲州屋 61

・(株)うちだ 59

・内田クリニック 51

・Aプラス設計 60

・大泉はなわクリニック 56

・小澤畳工業所 60

・CAFÉ&PASTAKURU 60

・(有)キタムラ 48

・草津温泉 58

こ 甲府一高59会 49

・甲府一高あおぞら会 実行委員会 57

・甲府一高湘南地区同窓会 57

・甲府一高東京50会 56

・甲府一高東京51会 54

・国際建設(株) 55

・五光電工(株) 55

・(株)コスモエナジー 56

・さいとうクリニック 61

・境川カントリー倶楽部 55

・茶房どんぐり 59

・山日YBSグループ 58

・C&Cクラブ 54

・(株)シオザワ 61

・(医)慈広会介護老人保健施設

メイプル 54

・清水喜彦(山梨県人会) 57

・シミックホールディングス(株) 52

・(株)少國民社 49

・昭和42年卒業生一同 56

・昭和53年卒業生一同 57

・S57卒東京同窓会一同 54

・昭和62年卒業生一同 表3

42

編集後記

私がはじめて東京同窓会に参加したのは2017年、当時まだ九段の会場で、参加の理由は2年後に迫った甲府同窓会当番幹事としてまあ現場を見ておこう、という甘い態度であった。甲府も東京も、同窓会には一度も参加していない不真面目な同窓生たる私はしかし、九段の会場でわが應援団が演舞する姿を目の当たりにし、気づけば自分でも驚くほどでかい声で30年ぶりに校歌応援歌を歌っていたのだった。それは私の、一高生としての2度目の目覚めであったと思う。その時確かに窓が開いた感覚があった。

それから甲府同窓会の幹事学年を勤め、また應援団OBとしても同窓会へ参加してきた私が、いよいよ東京の当番幹事になったときに手を挙げたのがこの記念誌の担当である。あの日の、同窓生として心の窓が鮮やかに開いていった感覚を

どうしても誰かに伝えたい、という極めて個人的な理由がそうさせたわけで、ゆえに本年のテーマを受け入れてくださった東京同窓会幹事の皆様方には感謝しかない。

編集と進行についても多くの方々に助力をいただいた。インタビューを快く受けてくださった諸先輩、取材に協力いただいた母校の先生方、寄稿してくれた同窓生、広告と協賛をくださった皆様、制作の少国民社様、高校時代のように再びともに汗をながした当番幹事学年の仲間、そして一高に関わる全ての方に感謝を捧げます。ほんとうにありがとうございました。

日新鐘32号、このほんの小さな冊子でも、誰かの窓を開ける一助になれば嬉しい。

記念誌担当責任編集者 杉浦 昭太郎

2026年東京同窓会当番幹事 昭和62年卒

幹事長	古屋高一				
副幹事長	小林春彦	水田あかね	牛木直美		
実行委員長	古屋高一				
事務局長	岡島加代子				
一紅部会	水田あかね	岡島加代子	小高直子	平賀陽子	牛木直美
会計部会	松本健一				
広告部会	小川真木	岡島加代子	小林春彦	古屋高一	
記念誌部会	杉浦昭太郎	小林春彦	岡島加代子		
懇親会兼IT部会	森澤善人	柴田和則			
甲府窓口	宮川勇徳	柴田和則	田中嘉一郎		

TOKYO2026

第66回 甲府中学・甲府一高東京同窓会 2026年7月11日(土)

同窓生、その窓が開くとき



ご参加いただいた同窓生の皆様、ご協力、ご支援くださった皆様
まことにありがとうございました

また来年、お会いしましょう！

T  **KY**  **2026**

第66回甲府中学・甲府一高東京同窓会

昭和62年卒業生・当番幹事一同

夢はかりふんだんにあつた。
ただ追いかける日々だった。
人生は、短くて、でもきつと長い。
我々は、一高生はまだ歩く。
途方もない距離を歩いた。
我々だけの体験が
ただそうさせるのだ。
日に新た、また日に新た
と、いつまでも背中を押す。
あの日々に、人生の感謝を。
さあ、窓を開けよう。

TOKYO2026

第66回 甲府中学・甲府一高東京同窓会 2026年7月11日(土)

同窓生、その窓が開くとき



この冊子は再生可能電力(CO2排出ゼロ電力)
で印刷されています。